

## モンゴルにおけるアラク・スウルデの祭祀について

楊 海 英

(静岡大学)

**The Worship of the Alay Sülde (Speckled Standard)  
in Otoγ Banner, Ordus, Mongolia**

YANG Haiying

Shizuoka University

*Sülde* is a deity of guardianship unique to Mongolia, in which the soul of *sür* resides. There are mainly three types *Sülde* in Mongolia. Firstly, the “Black *Sülde*” symbolizes warfare. It is believed by Mongolian people that Chingis Khan himself worshipped this deity. Secondly, the “White *Sülde*” was a national flag of the state of Khan. Contained in Mongolian chronicles is a record that the flag was officially hoisted at the time of the coronation of Chingis Khan centuries ago.

The “Black *Sülde*” has been enshrined in the Ordus region of Mongolia for the past 700 years or so, whereas the “White *Sülde*” was hoisted in garnisons of the imperial army up until the 1630’s, following the military expeditions of the emperors Khan through generations. At a later stage, during the Qing dynasty, the “White *Sülde*” also came to be worshipped in the Ordus region. The third one, “*Alay Sülde*” means the “Speckled Standard” which was enshrined for centuries at the Otoγ Banner in Ordus up until 1956. It is important to note that all three *Sülde* were enshrined and worshipped in Ordus.

I went over to the Otoγ Banner for field survey in spring 1996. Those who officiate at the *Alay Sülde* rituals call themselves *Qosiyu Darqad*. This paper is based on data and information provided by several *Qosiyu Darqad*. Interestingly enough, according to them, there are two different theories about the origin of *Alay Sülde*. One claims that *Alay Sülde* was, in fact, the *Sülde* for Chingis Khan and that the rituals were presided over by his youngest son Toloï Ejen. The other also states that *Alay Sülde* was the *Sülde* for Chingis Khan, but maintains that the rituals were presided over by Qasar, a younger brother of Chingis Khan. According to the

---

**Keywords:** Ordus Mongols, Otoγ Banner, The Alay Sülde (speckled standard), The Darqad, The Mongolian clan (oboγ).

キーワード： オルドス・モンゴル、オトク旗、アラク・スウルデ、ダルハト、オボク

latter, during the military expedition of Chingis Khan to conquer the state of Tangyud (西夏), Qasar contributed significantly to the success of operations, because of which the younger brother was given the honour of officiating at the rituals for worshipping *Alay Sülde*.

As a matter of fact, there are two specific points of interest to me. Firstly, for centuries, those who have officiated at rituals for Toloï Ejen, the youngest son of Chingis Khan, have been actively involved with the rituals for *Alay Sülde* as representatives of Toloï Ejen. Secondly, included in the prayer book of *Alay Sülde* is a phrase which reads, created by Bodančar, symbolizing the clan of *Borjigin*. For this reason, the author of this paper thinks that *Alay Sülde* was a guardian deity for the clan of *Borjigin*, who produced the family of Chingis Khan, and that the rituals were presided over by Toloï Ejen, the youngest son of Chingis Khan. Mongolia has maintained the social tradition that a family estate is to be inherited by the youngest child. In this context, therefore, it seems to be logical to assume that Toloï Ejen, the youngest child, was the one who, as a legitimate heir, succeeded to the right to preside over the rituals of *Alay Sülde*, which had been regarded as the guardian of the Khan family for centuries since the ancient times of Bodančar, their legendary ancestor.

- |                       |                          |
|-----------------------|--------------------------|
| はじめに                  | 3 祭祀者が語るアラク・スウルデの実態      |
| 1 アラク・スウルデに関する従来の研究   | 3.1 アラク・スウルデの移転          |
| 1.1 アラク・スウルデに関する従来の研究 | 3.2 インフォーマントと祭祀者集団       |
| 1.2 アラク・スウルデの祭祀文書     | 3.3 祭祀者集団の職掌と管理体制        |
| 2 文書史料からみた祭祀状況        | 3.4 アラク・スウルデの祭祀          |
| 2.1 文書史料の概要           | 4 結びにかえて                 |
| 2.2 主要な文書史料に関する若干の検討  | 4.1 アラク・スウルデの主宰者は誰なのか    |
|                       | 4.2 アラク（まだら）という表現の政治的な意義 |

### はじめに

内蒙古自治区の西部、黄河の大湾曲内に位置する高原地帯をオールドスとよぶ。この地域にチンギス・ハーンとその一族を対象とする祭殿と祭祀が数百年にわたって維持されてきた。モンゴル族はこの祭殿を「八つの白い天幕」(Naiman Čayan Ordun) とよぶ (Sayinjiryal & Šaraldai 1983。以下「八白宮」

と略す)。ロブサンダンジンの『黄金史』第268節では、チンギス・ハーンの祭殿を「あまねく国々の守護神、永遠なる全世界の支柱たる八白宮」(qamuγ ulus-un sitügen boluγad, qamuγ-un möngke qadasun Naiman Čayan Ger bolbai-ǰ-a) と位置づけている (Lubsangdanjin 1990, P.127)。『蒙古源流』によると、モンゴルの歴代大ハーンは即位のときあるいは即位後に八白宮に参拝しなけれ

ばならなかった (Sayang Sečen 1956, manuscript A, p.143, manuscript B, p.126, manuscript C, p.142)。ハーン位につく者は、チンギス・ハーンの御前で自らの正統性を確認しなければならなかった。『黄金史』と『蒙古源流』の記述からもあきらかなように、八白宮は、モンゴルの歴史のなかで大きな政治的な役割を果たしてきたのである。

1911年、ハルハ・モンゴル諸部が独立を宣言する。独立したジェブザンダンバ政権は、1913(共載三)年にオルドスのウーシン旗の札薩克チャクトラセレンと連絡しあい、八白宮を外モンゴルへはこび、新生国家のシンボルにしようとした記録<sup>1)</sup>がある (Edükesig 他 1981, pp.207-208)。時代がうつりかわって1990年代にはいり、国名をモンゴル人民共和国からモンゴル国に改めた現在、ウランバートルなどでは独自のチンギス・ハーン祭殿を建設しようとする動きが活発化していることを筆者は確認している。これにはオルドスにある八白宮の祭祀者たちも積極的に関与している (Davaĵamsu 1998, p.10)。チンギス・ハーンの祭殿を国家と民族の統合の象徴とする思想は昔もいまもかわりはない。

八白宮以外にも、オルドス地域には複数の祭殿と祭祀が存在する (Sayinĵiryal & Šaraldai 1983, pp.389-412, ホルチャバートル & 楊 1997, pp.69-70)。これらの複数の祭殿は、八白宮を中心に、その祭祀活動は相互に密接に関連し、連動していたことを筆者は指摘してきた (楊 1995, 1996, 1998, 1999, ホルチャバートル & 楊 1997)。その際、具体的には以下のことを明らかにした。

まず、祭祀者集団に焦点をあててみよう。八白宮の祭祀者集団はダルハト (Darġad)

とよばれる。ダルハトは左右(東西)両翼に分かれ、内部において18のケシク (kesig) と称する組織に編成されていた。ケシクは本来大ハーンの親衛部隊を意味することばである。右翼(西部)ダルハトは、チンギス・ハーンの祭殿八白宮の祭祀を主宰し、かれらは基本的に十三世紀ころの有力な部族出身者の血統をひく。左翼(東部)ダルハトは、チンギス・ハーンの軍神とされる黒いスウルデ (Qar-a Sülde) の祭祀を主宰し、こちらの方は親衛軍ケシクゆかりの者からなっていた。このように、ダルハトは出自を超越した祭祀者集団である (楊 1995, pp.27-34)。ダルハトたちが主宰する八白宮祭祀は、複雑な儀礼体系からなるが、首尾一貫しているのは、全モンゴル族の政治的統合を強化しようとする明確な目的である (楊 1995, p.49)。ダルハトたちはまたヤムタト (yamutad) と称される。ヤム (yamu) とは大ハーンからの特別の恩賜を意味し (楊 1995, p.31)、ヤムタト (恩賜保持者) とは、いわばかれらの特権的な一面を示す名称である。八白宮以外の祭祀にたずさわる祭祀者もダルハトの身分をもち、ヤムタトと自称する。

つぎに、八白宮祭祀とオルドス地域にあるほかの祭祀活動との関連性に注目してみよう。一例として、オトク旗にあるトロイ・エジンの祭祀をあげることができよう。祭祀は、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンを対象としている。

モンゴルにおいて、末子はオトゴン (odyun) とよばれる。これは「火を守る人」の意味である。末子には、一族の象徴である炉をまつり、「炉と火の息子」として父親からの財産と歴代祖先をまつる「祖先祭祀」の

1) 原文の一部は以下の通りである。Jarliġiyar barayun emün-e kiġayar-un kereg-i bügüde ĵakirqu olan Mongyolġud-i ilbin toquniġulqu sayid ĵiyün vang-un biġig Yeke ĵuu-yin ġiyulġan-u ĵasay vang Ģaydarsereḡ-dür tusiyan ilegebe …… kürkül-e kinan üġejü. Ģinggis qaġan-u beye-e ba sülde tuy tak-ilya-yin nom sudur eldeb erdeni-yin saba kereġsel ĵiġsayal-un ĵerge ġiqula kereġlegdekü ĵüüli qamtu-bar silġiġülün ĵalaqu-bar ĵabdun beledgeĵü …… (Edükesig 他 1981, pp.207-208)。

主宰権を継承する権利と義務がある（楊 1996, pp.658-660）。このような伝統から、末子トロイ・エジンの祭祀者たちは、毎年陰暦3月20日すなわち八白宮の「春季大祭」の前夜にガリル（*γaril*）祭をおこなう。八白宮の近くで極秘に挙行されるガリル祭は、チンギス・ハーンを生んだ「黄金家族」（*altan uruγtan*）のボルジギン部（*Borjigin Oboγ*）内部の家族祭である。ここで、トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちは、末子トロイ・エジンを代表してチンギス・ハーン一族の歴代祖先をまつる、という演出をする。その意味で、末子トロイ・エジンの祭祀者たちが主宰する祖先祭祀は、八白宮祭祀の一部を構成しているといえよう。

第三、モンゴルの政治と宗教の理論的体系（*törü šasin qoyar yosun*）のなかで、八白宮祭祀やトロイ・エジン祭祀はいかに位置づけられているのだろうか。この点をわれわれは『十善福白史』（*Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke*）に求められよう（楊 1995, pp.42-44, 1996, p.693）。この書は、13世紀にフビライ・ハーンが著し、のちにホトクタイ・セチェン・ホン・タイジが再編集したと伝えられる（Liu jinsuo 1981, pp.3-4）。『十善福白史』はそのなかで、八白宮の原型であるモンゴル帝国の「九大象徴」（*yisün yeke belge*）とその祭祀者たちの爵位と職掌、祭祀儀礼としての四季大宴および祭祀の指針書「黄冊」（*Sir-a Bičig*）などについて詳しく規定している（Liu jinsuo 1981, pp.85-89）。つまり、祭祀活動が具体的にどのように運営されるかについて、「黄冊」を検討しなければならないということである。

「黄冊」は後世に具体化、充実化され、通常では『金書』（*Altan Bičig*）と称されるようになった。文化大革命のとき、八白宮内の『金書』類はほとんど失われた。筆者はモンゴル国中央図書館に保管されていた二種類の『金書』、内モンゴルのインフォーマントから入手した『金書』、計三種の『金書』を整理

し公開した（楊 1998）。

『金書』には八白宮祭祀に負うべきモンゴル各部族の義務（*alba*）、祭祀に使用する各種祈祷文などが含まれている。政治との関連から見た場合、『金書』が歴代ジノンもしくはハーンによって書写されていた現象は注目すべきであろう（楊 1998, pp.67-76）。『金書』の書写は、年代記の編纂と同等に重要な政治行事であり、おそらくハーンの即位とも関連していた可能性を筆者は以前に指摘した（楊 1998, pp.68-71）。さらに、『金書』のなかに年代記の内容を思わせる記述があり（楊 1999, p.205）、書写のくりかえしには、モンゴルの歴史が反映されているといえよう（楊 1998, pp.67-76）。

オルドスにあるさまざまな祭祀は、チンギス・ハーンとその一族を対象とするだけでなく、もうひとつ、トゥク・スウルデ（*tuγ-sülde*）の祭祀にも政治的な意味合いをもたせている。トゥクは旗纛で、スウルデとは、魂（*sür*）がやどる守護神であると理解されている（ウラヂミルツォフ 1936, pp.348-349）。モンゴル族はトゥクとスウルデを国家や民族のシンボルとして理解している。本論文では、ウラヂミルツォフの見方にしたがって、スウルデを守護神と訳す。

オルドス・モンゴルは主として三種類のスウルデを維持してきた。黒いスウルデ（*Qar-a Sülde*）は、チンギス・ハーン自らがまつっていたモンゴル軍の軍神とされている。筆者は、黒いスウルデはおそらく『十善福白史』にある国家の「九大象徴」の筆頭にされている「黒い旗」（*Qar-a Tuγ*）が原型ではないか、と想像している。遅くとも元朝のときからスウルデは国家のシンボルのひとつとしてまつられるようになったのであろう。先に述べた八白宮の祭祀者集団ダルハトの半分は軍神黒いスウルデの専属祭祀者で、黒いスウルデの祭祀は八白宮の祭祀体系に吸収されたかたちになっている（楊 1999, p.137）。

もうひとつ、白いスウルデ（*Čayan Sülde*）

がある。黒いスウルデが軍神であるのに対し、白いスウルデはモンゴル帝国の象徴とされる。筆者は以前、白いスウルデの祭祀者集団に直接インタビューをし、白いスウルデ祭祀の実態を報告した（楊 1999, pp.135-212）。その結果、以下のことが判明した。

本来、白いスウルデは大ハーンの駐在するチャハル・モンゴル部によって維持されていた。チャハル部は後金国に激しく抵抗したため、厳しい再編成を余儀なくされた。モンゴルが後金国の支配を受け入れていく大変動のなかで、おそらくは17世紀なかばころから白いスウルデとその祭祀者たちはオルドス・モンゴルに合流した。白いスウルデの祭祀者たちはオルドスのチンギス・ハーン祭殿、八白宮に精神的な支援を求めた。白いスウルデの祭祀をオルドスで維持していくなかで、『蒙古源流』の著者サガン・セチェン・ホン・タイジとその直轄集団が積極的に関わったことが検証されている（楊 1999, pp.135-193）。

三番目にあげなければならないのが、アラク・スウルデである。アラクとは「まだら」の意味である。軍神とされる黒いスウルデと、帝国のシンボルと見られる白いスウルデに関する従来の諸研究を土台に、本研究では文書記録と実際に祭祀にたずさわっていた祭祀者たちの証言にもとづいてアラク・スウルデの祭祀の実態を再現する。それによってモンゴルの祭祀活動における「スウルデ祭祀」の政治的な意義を検討する<sup>2)</sup>。

ここで最後に、本論文で使用するモンゴル文史料、年代記に関する私自身の観点を明示しておかなければならない。『モンゴル秘史』は、エルデンタイとアルダシャブ両氏がモンゴル文に還元註釈し、1986年に内蒙古教育出版社から出版されたものを引用する。モンゴル各部の方言はもちろん、トルコ語やダウール語、満洲語についても豊富な知識をもつ

両氏の注釈が、数多い『モンゴル秘史』の訳注書類のなかでも、もっとも適切である。なによりもチンギス・ハーン祭祀を観察し、八白宮の指針書である『金書』を引用した註釈は、画期的な作業であり、チンギス・ハーン祭祀を研究する筆者のような人類学学徒にもっとも有用である。また、ロブサンダンジン（Lubsangdanjin）の『黄金史』は、1990年にウランバートルから出版された影印本（Lubsangdanjin 1990）を使用する。ただし、『黄金史』の節の分割については、チョイジ氏の校注本（Čoyiji 1983）を参考にする。なお、人名と地名のカタカナ表記は現代オルドス・モンゴル語口語に近い方式をとる。

## 1 アラク・スウルデに関する従来の研究

ここでは、アラク・スウルデに関する従来の研究を回顧する。

### 1.1 アラク・スウルデに関する従来の研究

アラク・スウルデに関する研究は決して多くないが、いずれも年代記と関連づけているため、ここでまず、『モンゴル秘史』第170節、『黄金史』第170節に現れるアラク・スウルデ（トゥク）に関する記述を見ておく必要があるだろう。ケレイト部のワン・ハンとジャムハの連合軍にチンギス・ハーンがたちむかったときのことである。チンギス・ハーン側の先鋒をなしていたオルクト（Orqud）部とマンガト（Mangγud）部を指してジャムハは、つぎのように表現した（Eldengtei & Ardajab 1986, pp.493-495）。

öcūken-eče üldü jida-dur daduγsan irgen tede,  
幼少のときから剣や槍になれ、かれらは。

2) 黒、白、アラク以外にも、オルドスには複数のスウルデ祭祀が存在する。他のスウルデについても、今後逐一とりあげていきたい。

qarayčiyud alayčiyud tuytan bui tede.

黒とアラクの麤などがある，かれらには。

『黄金史』にもほぼ同じような語句がある (Lubsangdanjin 1990, p.60)。従来の諸研究はいずれも上述の記録にあるアラク・トゥク (スウルデ) に注目している。

### 1.1.1 サインジャラガルとシャラルダイの研究

チンギス・ハーンの八白宮祭祀に関する里程碑的な研究として，サインジャラガルとシャラルダイの『黄金オールドの祭祀』 (*Altan Ordun-u Tayilya*) をあげることができよう。この著作の出版にはつぎのような背景がある。

共産党政権下の，1958年の人民公社化とともに，モンゴルなどの少数民族の伝統文化は破壊の対象とされた。チンギス・ハーン祭祀をはじめ，オールドス地域にあったさまざまな祭祀活動がすべて禁止された。約二十数年間の政治的な混乱を経たあと，1980年代初頭には伝統的な祭祀活動の復活と維持が，民族文化復興の最優先課題のひとつとなった。八白宮の祭祀者であるシャラルダイと文人サインジャラガルは，1958年以前にオールドス各地に存在していた諸祭祀の祭祀者に精力的にインタビューし，『黄金オールドの祭祀』を書きあげた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983)。

『黄金オールドの祭祀』はチンギス・ハーンの八白宮祭祀，祭祀者ダルハトの社会組織を中心としながら，「遊牧民の守護神スウルデ」という章をもうけ，チンギス・ハーンの軍神

とされる黒いスウルデ，モンゴル帝国のシンボルとされる白いスウルデなどについても詳しく記述している (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.280-344)。ここでは，アラク・スウルデについての両氏の報告をまとめたい。

サインジャラガルとシャラルダイは，つぎのように報告している。アラク・スウルデは，チンギス・ハーンの軍神黒いスウルデの祭祀について大規模な祭祀活動のあった守護神 (*sülde sitügen*) であるという。このアラク・スウルデが上述の『モンゴル秘史』に見られる「バラーン・アラク・トゥク」 (*barayan alay tuy*) に相当するか否かは断定は難しい，と慎重な態度をとっている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.334-335)。

アラク・スウルデは，チンギス・ハーンの弟で，名射手ハサルの守護神 (*sitügen*) であるとも伝承されている。ハサルがタンゲート (西夏) を征服したときから，オールドスでまつられるようになったという。一部の年代記，たとえば『黄金史』第266節では，チンギス・ハーンがタンゲート征服の際に，弟ハサルも同行したと伝えている (Lubsangdanjin 1990, pp.121-125)。サインジャラガルらは上記の民間伝承と年代記との関連についても，懐疑的である (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.334-335)。

アラク・スウルデを弟ハサルの守護神とする伝承をサインジャラガルとシャラルダイ両氏がまったく否定したわけでもない。両氏はさらにウラーンチャブ盟ダルハン・ムーミンガン旗でまつられている「ハサルのスウルデ<sup>3)</sup>」についても情報を集めていた。ハサルはチンギス・ハーンの為政に鼎力を捧げ，そ

3) サインジャラガルとシャラルダイが言及したウラーンチャブ盟ダルハン・ムーミンガン旗のハサルの祭祀に関する情報を整理しておこう。ハイシツヒは内モンゴルの研究者ドルンガ (Dorungya) からの情報を伝えている。それによると，1958年11月，ドルンガはウラーンチャブ盟バヤン・オボー近くにあるブラクン・クンディーにあるハサルの祭祀から文書と絵を収集した。文書のなかでとくに注目されたのは，1) 『アルタン・トブチ』 (*Činggis qaγan-u altan tobči neretü čadiy*) と2) 『聖チンギス・ハーンの祭祀の書』 (*Boγda Činggis qaγan-u takil-un sudur orosiba*) である。ハイシツヒは『アルタン・トブチ』について検討した (Heissig 1987, pp.209-223)。『聖チンギス・ハーンの祭祀

の部衆はのちにホルチン部 (Qorčîn ayımay) に発展した。オルドス部のなかにもホルチンという父系親族集団 (Qorčîn Oboı) は多く、八白宮の祭祀者集団ダルハト内にもホルチン・ケシクというグループがある。これらのホルチンたちがハサルのスウルデをまつのも不思議ではないという (Sayınjıryal & Šaraldai 1983, p.335)。

サインジャラガルらはアラク・スウルデについてこれ以上の論考をしていないが、さらに別の情報を提供している。それによると、オトク旗のほかに、ハンギン旗にもアラク・スウルデ (アラク・トゥク) がまつられていたという。ハンギン旗の方はモンゴル最後のハーン、リクダン・ハーンのスウルデであったとされている (Sayınjıryal & Šaraldai 1983, p.340, pp.409-410)。清朝時代には旗衙門が主宰する祭祀があり、その実態を示す複数の文書が『チンギス・ハーンの八白宮』に収録されている (Narasun & Vangčuy 1998)。その後、サインジャラガル氏は別の論文のなかでハンギン旗内でまつられていたリクダン・ハーンのアラク・スウルデについて詳しく報告している (Sayınjıryal 1991, pp.51-61)。

### 1.1.2 ホルチャバートルの研究

オトク旗出身の民族学者ホルチャバートルは、オルドスでまつられていたアラク・スウ

ルデはおそらく上述の『モンゴル秘史』などに現れるスウルデであろうと推測している (Qurčabayatur & Üjüm-e 1991, pp.71-72)。

『黄金史』第221節によると、ハサルとチンギス・ハーンは一時シャマンの讒言によって仲を悪くしたことがある。ハサルに分け与えていた四千戸の属民から千四百戸を減らす措置をチンギス・ハーンはとる。のちに二人は母親の調停で仲直りをする (Lubsangdanjin 1990, pp.94-95)。ホルチャバートルはこの記述に注目し、以下のような興味深い仮説をうちだしている。以前にチンギス・ハーンがさしおさえた千四百戸の代りにオルクト部とマングト部を与えたことから、ハサルがアラク・スウルデをまつようになったかもしれないという (Qurčabayatur & Üjüm-e 1991, pp.72)。つまり、本来はオルクト部かマングト部の守護神であった纛が、属民の領有権の移行によってハサルに祭祀権が移った、との説である。

サインジャガルとシャラルダイは、アラク・スウルデがハサルの守護神かどうか明確な見方を示さなかった。これに対してホルチャバートルは、ハサルがアラク・スウルデをまつようになった経緯を推測するなど、ハサルとアラク・スウルデとの関連にかなり肯定的な態度をとっている。

の書』は、後世のハーンがチンギス・ハーン祭祀における諸儀礼をとりおこなう際の事項を記したもので (Chiodo 1989/1991, p.194)、かつてチャハル万戸が主宰していたチンギス・ハーン祭祀に関するものであろうとの見解がある (Qurča 1988a, p.112, p.119)。ハサルの祭殿から見つかっても、チンギス・ハーン祭祀に関する祭祀書である、との点は筆者も賛同している。ケルレン・バラス・ホトのチンギス・ハーン祭殿のように、モンゴルの有力な政治家たちが八白宮とは別に、新たにチンギス・ハーン祭殿をつくったことがあり、その際、祭祀文書は八白宮のものを書写した (楊 1998, pp.10-13)。したがってハサルの祭殿にあった『聖チンギス・ハーンの祭祀の書』も本来はオルドスの八白宮のものであった可能性も排除できない。近年、ハサルの祭祀に関する研究 (Senggerinčin 1989, pp.35-44. Dalanγurba 1989, pp.44-50) も現れた。ハサルの祭祀を維持する祭祀者がハサルの直系子孫であった (Senggerinčin 1989, pp.35-44. Dalanγurba 1989, pp.47-48) ことは、注目すべきである。八白宮の祭祀では、もと功臣の子孫や有力部族出身者がチンギス・ハーンをまつることになっている (楊 1995, pp.29-34)。出自を超越した集団がチンギス・ハーンをまつることによって、祭祀の政治統合の目的を強めている (楊 1995, p.34, p.49)。これに対して、ハサルの祭祀は「家族内部の祭祀」とのイメージが強い。

## 1.2 アラク・スウルデの祭祀文書

1954年春、内モンゴルの学者メルゲンバートル氏がアラク・スウルデの祭殿に保存されていた『チンギスの黄色い伝記』(*Činggis-ün Sir-a Tuquji*) とよばれる手写本を入手した。写本は『蒙古源流』の一抄本で、1962年に出版され (Mergenbayatur 1962)、通常「アラク・スウルデ本」とよばれるようになった。チンギス・ハーン一族の系統を記した年代記が保存されていたことから、アラク・スウルデはきわめて重要な政治的な役割を果たしていたのではないかと推察できよう。

アラク・スウルデの祭殿とは別に、チンギス・ハーンの祭殿八白宮にも数多くの祭祀文書が保存されていた。1957年夏にオルドスの八白宮を訪れたモンゴル人民共和国のリンチン氏は、「アラク・スウルデの献香および祭史」(*Alay Sülde-yin sang böged öčig orusi-ba*) という文書を手し、後日発表している (Rintchen 1959, pp.99-101)。リンチン氏のテキストには、「イケ・ジョー盟オトク旗の祭祀用冊子」ということばがある (Rintchen 1959, p.97)。その後、筆者が公開した八白宮の指針書『金書』のなかにも「アラク・スウルデの献香」(*Alay Sülde-yin sang*) と「アラク・スウルデの祭史」(*Alay Sülde takily-a-yin öčig*) が含まれていた (楊 1998, pp.90-91, pp.177-179)。このように、チンギス・ハーンの祭殿に、オトク旗内で使用されていた祭祀文書が保管されていた事実から、アラク・スウルデの祭祀活動はなんらかのかたちで八白宮祭祀と関連していた可能性を示しているのではなかろうか。

社会主義時代、アラク・スウルデの祭祀は長く中断されていたため、1980年代初期になると、祭祀のときに唱えられていた各種経文は失われ、それを記憶している人も少なくなっていた、とサインジャラガルとシャルルダイは報告している (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.338)。1996年に筆者が訪れたときも、状況は変わっていなかった。

以上、アラク・スウルデに関する従来の報告と研究を整理した。1980年代から1990年代にかけての研究は、資料不足の制約をうけていたため、不十分な一面もあることは否定できない。近年、档案資料の公開により、アラク・スウルデ祭祀に関する情報は少しずつ増えてきた。本研究は、新しい文書史料と祭祀者からの情報に依拠していることを強調しておきたい。

## 2 文書史料からみた祭祀状況

本章では、文書 (档案) 史料を分析し、清朝後期から中華民国時代を経て、中華人民共和国成立後の1950年までの祭祀状況を回顧する。

### 2.1 文書史料の概要

チンギス・ハーンの八白宮祭祀をはじめ、オルドス地域にある諸祭祀に関する文書史料をいち早く公開したのは、地元の伊克昭盟档案馆である。『成吉思汗八白室』と題する七輯の文書集を1985年から1987年にかけて、謄写版印刷で世に呈示した。筆者の初歩的な検索の結果、『成吉思汗八白室』のなかに、オトク旗領内のアラク・スウルデに関する資料はひとつだけ (Narasun & Erdemtü 1987, p.50) 収録されていた。

文書集の編集と出版を陣頭で指揮したのは、オルドスのウーシン旗出身のナラソン (Narasun) 氏である。七輯の『成吉思汗八白室』は、祭祀の詳細な記録をはじめて世に公表したことに大きな意義があった。しかし、当時の状況では、祭祀に関するすべての档案資料を包括することはできなかった。祭祀にはモンゴルとしてのアイデンティティが貫徹されていることから、その後、資料を一層充実させて公表する必要性をナラソンら内モンゴルの知識人たちは痛感した。かれらの努力の成果として、1998年に新たに『チンギス・



ハーンの八白宮』(Narasun & Vangčuy 1998) が出版された。編集者のひとりナラソンは筆者に、『チンギス・ハーンの八白宮』には中国全土から集めた千点以上の档案が網羅されている、と語った。

『チンギス・ハーンの八白宮』は所収文書を基本的に年代順に並べている。そのうちアラク・スウルデに関する文書が約 80 点ある。この 80 点の文書を年代順にまとめたのが表 1 である。表 1 の文書の番号は年代順にしたがって、筆者がつけたものである。アラク・スウルデに関する文書は、1865 (同治四) 年を上限とし、下限は 1950 年 10 月 20 日に至る。80 点の文書を内容的に以下のように分類できよう。

- (1) 祭祀者の人事異動について：約 36 点
- (2) 祭殿類の更新と整備について：14 点
- (3) 寅年の血祭 (Doysiγuly-a) について：10 点
- (4) 祭祀に関わる貴族タイジの任命：6 点
- (5) 祭祀の実施について：5 点
- (6) イケ・チャイダムという地の守護神について：2 点
- (7) スウルデの皮綱祭

表 1 アラク・スウルデ (Alay Sülde) に関する文書の概要

番号	年 代	内 容	備 考
1	1865年?月15日	寅年の血祭の準備	
2	1865年?月20日	寅年の血祭の準備	
3	1865年?月23日	寅年の血祭の準備	
4	1865年7月23日	寅年の血祭の準備	
5	1865年?月5日	寅年の血祭の準備	
6	1875年1月2日	新職掌の任命	
7	1914年12月31日	寅年の血祭にともなう準備	ハンギン旗の档案内にあり
8	1915年3月16日	喇叭の祭殿の更新	
9	1916年3月9日	新職掌の任命	
10	1916年11月17日	祭祀に関わるタイジの任命	参加したタイジが事後報告
11	1917年2月27日	新職掌の任命	
12	1917年2月27日	祭殿の覆いの更新	
13	1917年12月4日	祭祀に関わるタイジの任命	
14	1918年6月13日	新職掌の任命	
15	1918年11月19日	新職掌の任命	
16	1918年11月26日	祭祀に関わるタイジの任命	
17	1920年9月1日	祭殿の柵を新しくすること	
18	1920年11月29日	祭祀に関わるタイジの任命	
19	1922年6月29日	トロイ・エジンの祭祀者との関連	
20	1922年6月17日	新職掌の任命	
21	1922年7月18日	祭祀に関わるタイジの任命	
22	1925年2月21日	祭殿の柵の整備	
23	1925年2月21日	新職掌の任命	
24	1925年7月17日	新職掌の任命	
26	1920年代	新職掌の任命	
27	1928年2月26日	寅年の血祭の準備にともなう人事	
28	1928年2月26日	スウルデの竿の更新	
29	1928年3月11日	新職掌の任命	
30	1928年8月4日	スウルデの整備	
31	1928年8月11日	新職掌の任命	
32	1928年閏7月7日*	スウルデの整備	
33	1928年閏7月11日*	新職掌の任命	
34	1928年11月25日	祭祀の実施について 役人たちに通知	血祭?
35	1928年11月25日	祭祀の実施について	
36	1928年12月2日	祭祀の実施について	
37	1928年12月17日	祭祀用の経文について	
38	1928年12月17日	新職掌の任命	
39	1931年11月1日	新職掌の任命	
40	1933年2月23日	新職掌の任命	

番号	年 代	内 容	備 考
			(tasm-a)について： 1点
41	1939年4月28日	新職掌の任命	(8) 末子トロイ・エジンの 祭記者との関連： 1点
42	1940年3月15日	新職掌の任命	
43	1940年8月31日	祭祀の実施について	
44	1942年11月11日	新職掌の任命	(9) 祭殿周辺の開墾につ いて：1点
45	1943年3月5日	イケ・チャイダムの 守護神について	
46	1944年2月20日	新職掌の任命	(10) 祭祀の経文につい て：1点
47	1944年11月10日	イケ・チャイダムの 守護神について	
48	1945年5月4日	スウルデ周辺の開墾 地について	(11) その他：3点
49	1945年12月9日	祭祀活動の強化、祭祀 者が専念するように	以下では、上記80点の なかから代表的な文書を 呈示し、当時の祭祀状況 を考察する。
50	1946年4月27日	新職掌の任命	
51	1946年5月8日	祭殿の覆いの更新	
52	1946年5月25日	新職掌の任命	
53	1946年8月11日	新職掌の任命	
54	1947年5月1日	ハサルの祭祀について	
55	1948年7月20日	新職掌の任命	
56	1948年8月25日	新職掌の任命	
57	1948年9月6日	新職掌の任命	
58	1948年9月21日	祭殿の柵の更新について	
59	1948年9月28日	新職掌の任命	
60	1948年10月16日	新職掌の任命	
61	1949年1月3日	祭祀の実施について	
62	1949年6月2日	新職掌の任命	
63	1949年6月3日	新職掌の任命	
64	1949年6月3日	新職掌の任命	
65	中華民国時代	祭祀に関わるタイジの 任命	
66	19??年2月7日*	新職掌の任命	
67	1950年3月12日	新職掌の任命	
68	1950年3月12日	新職掌の任命	
69	1950年3月14日	新職掌の任命	
70	1950年3月14日	寅年の血祭の準備	
71	1950年3月14日	寅年の血祭の準備	
72	1950年3月14日	スウルデの竿の更新	
73	1950年3月14日	血祭について	
74	1950年3月24日	新職掌の任命	
75	1950年10月18日	祭殿の更新について	
76	1950年10月18日	祭殿の更新について	
77	1950年10月19日	祭殿の更新について	
78	1950年10月20日	祭殿の柵に使う木材が 遅れたことに対する調査	
79	1950年10月20日	祭殿の更新と血祭の準備	

## 2.2 主要な文書史料に関する若干の検討

文書史料を分析するにあたって、以下三つのことをあらかじめことわっておきたい。

第一、『チンギス・ハーンの八白宮』の編集者は、文書を収録する際、「文書における（モンゴル文字の）書写形態を元のまま維持し、一部のことばには適切な注を入れた。文字は消えたり、文書が破損して読めなくなった部分は□□□で表記した」と説明している。(Narasun & Vangčuy 1998, p.1150)。また、上奏文や旗衙門からの発令文は、冒頭および末尾などに決まった様式があるが、編集者はそれらの形式的な文面のほとんどを省いて本文のみを収録している。本論文

においては原意を保つため、基本的に逐語訳を試みるが、( )内は筆者がおぎなった内容である。

第二、すべての文書に編集者がタイトルをつけている。編集者のこのような親切な行為は、実は大変な誤解を招いている一面がある。たとえばアラク・スウルデに関する文書には、ほとんど例外なく「名射手ハサルのアラク・スウルデ……云々」(Qabutu Qasar-un Alay Sülde……)といったタイトルが加えられている。アラク・スウルデがチンギス・ハーンの弟ハサルのスウルデかどうか、これから検討していくが、民間伝承を無批判的に文書編集の根拠にすることは、軽率な行為といわざるをえない。本論文では、文書の編集者たちがつけたタイトルは一切使用しないことにする。

第三、チンギス・ハーンの祭祀者である「五百戸の黄色いダルハト」や末子トロイ・エジンの祭祀ダルハトと同様に、アラク・スウルデの祭祀たちにも職掌(Tusiyal)と爵位(Čola)の二つの称号があった。職掌は、祭祀活動において所定の任務を分担し、全うすべき役割のことである。爵位は、モンゴル帝国期の軍事、政治組織名に由来する名誉的な称号である。後世において、職掌と爵位を厳密に区別しなくなり、祭祀者自身の認識もあいまいになった。詳しくは3.2で検討するが、ここでは訳文を理解するため、( )内に職、爵をおぎなったかたちで表現する。

### 2.2.1 祭祀の任命に関する記録

アラク・スウルデの職掌と爵位をめぐる人事異動について、文書に登場する人物をまとめたのが表2である。人事異動の実態を解明するため、表2とあわせて若干実例を呈示しておきたい。

#### その一 (No.6)

ここで、ミンガト(Mingyatu)に関するもっとも古い記録を見てみよう(Narasun & Vangčuy 1998, p.302)。ミンガトとは本来、モンゴル帝国時代における軍事組織名の「千戸長」を意味する。祭祀ダルハトの場合は、名誉的な爵号である。

アラク・スウルデのミンガト(をつとめる)ボロが、休みを乞うて(職を)離れた。その後任にミンガトのナランタイを新たに任命し、信任状に二箇所押印した。同治十三年冬の仲月の25日<sup>4)</sup>(1875年1月2日)

アラク・スウルデはオトク旗領内にあり、その祭祀者ダルハトたちはオトク旗の札薩克の管轄下におかれていた。この文書は旗衙門から直接ナランタイという人物に渡された信任状なのか、信任状を出したことを記録した日誌類なのかは、判断が難しい。いずれにしても、前任者が休みを乞うたため、後任を任命したことが示されている。

清朝時代では、同治年間以降の人事を示す記録はないが、中華民国時代の文書にナランタイという人名が見られる。

#### その二 (No.40)

ここでは、ゲケーという爵位(Göküge)をもつ人物が登場する(Narasun & Vangčuy 1998, p.865)。

アラク・スウルデのミンガト(をつとめる)ナランタイの事に関する件。(ナランタイを)ミンガトから解いた後任に、暫時ゲケーのジャワがミンガトの公務を執行するように、とって送付する信任

4) Alay Sülde-yin Mingyatu Boru čilüge yuyuju yaruşan oru-du Mingyatu Narantai-du sinedgen qalaju tusiyaqu jiyuqu bičig-tü tamaγa qoyar daruba: Būrintü Jasaγči-yin arban yurbaduγar on-u ebülün dumdadu sar-a-yin qorin tabun-a:

書がひとつ。中華民国二十二年春の最初の月の29日<sup>5)</sup>(1933年2月23日)

この記録は、ナランタイという人物が何らかの原因で、ミンガト(千戸長)の職を旗衙門から解かれたことを示している。このナランタイはおそらく先のNo.6の文書に登場し、1874年にミンガトに任命されたナランタイと同一人物であろう。となると、彼は実に59年間もミンガトをつとめたことになる。老齢のため、退任を旗衙門が迫ったのかもしれない。

### その三 (No.39)

つぎの文書は、祭祀者ダルハトたちの位階(jerge)について言及している(Narasun & Vangčuy 1998, p.851)。

アラク・スウルデの喇叭手で、管旗章京銜のボロルダイと梅林章京銜のグケーをつとめるバトジャブラが休みを乞うて(職掌を)離れたため、代わりに管旗章京銜のバダラホに喇叭手の職掌を(与え)、平民オウンビリグをグケーとして任命する。信任状ひとつに二箇

表2 Alay Süldaの職掌とダーマルをめぐる人事

番号	年代	職掌	前任	後任
6	1875.1.2	Mingγatu	Boru	Narantai
9	1916.3.9	Dayamal	Banzarjab (Jakiryučüi級)	Tarmirinčin (Jakiryučüi級)
11	1917.2.27	Dayamal	Yampil (Jakiryučüi級) Bürintegüs (Jalan級)	Qaraküü (Meyiren級) Šanjimidub
14	1918.6.13	Dayamal	Qaraküü (Meyiren級)	Borul dai (Jalan級)
15	1918.11.19	Dayamal	Tarmirinčin (Jakiryučüi, Jalan Janggi)	Nimasereng (Jakiryučüi級)
20	1922.6.17	Dayamal	Bayasγulang (Jalan級)	Qaljan (Meyiren級)
23	1925.2.21	Büriyečin	Gümbüjab	Borul dai (Göküge)
24	1925.7.17	Tuul (Tuγul)	Včirbatu	Öljejitü (Darqad)
26	1920年代	Dayamal	Bayanboru (Meyiren級)	Bayasγulang (Jalan級)
27	1928.2.26	Dayamal		Saranmanduqu Čaγadai Temürbatu Čaγančilagu (Somun Janggi)
29	1928.3.11	Dayamal	Erkimbayar (Kündü)	Čaγančilayu
31	1928.8.11	Büriyečin	Badaraqu	Jangg-a
33	1928.7.11*	Nangsu		Gempil
38	1928.12.17		Erdenibayatur (Janggi級)	Norla
39	1931.11.1	Büriyečin Göküge	Borul dai (Jakiryučüi級) Batujab (Meyiren級)	Badaraqu (Jakiryučüi級) Oyünbilig (庶民arad)
40	1933.2.23	Mingγatu	Narantai	Jaba(Göküge)
41	1939.4.28	Nangsu		Baldanuzar
42	1940.3.15	Büriyečin	Jangγ-a	Qovasing(Janggi級)
44	1942.11.11	Ningrub	Muusir-a(Darqad) Jisa-yin Nirba	Ja Küü(Janggi級)
46	1944.2.20	Dayamal	Čaγančilayu	Dalantai (Jalan級, 連隊長)
50	1946.4.27	Dayamal	Norla	Dalantai(Jalan級)
52	1946.5.25	Jumu	Bayanjab(Jalan級)	Dorji
53	1946.8.11	Büriyečin	Qovasing(Janggi級)	Qaljadai(Meyiren級)

番号	年代	職掌	前任	後任	
54	1947.5.1	Mingγatu	Altangerel(Āarbi級)	Altangerel	にはひとりの管旗章京と、東梅林と西梅林の二人がいた。いつごろから、なぜ、ダルハトたちにこのような官銜をつけるようになったかは不明である。筆者はアラク・スウルデのダルハトたちにこの点を確認することはできなかった。現時点で、筆者はダルハトたちもつ上記の官銜は、あくまで清朝時代の「名譽的な称号」であたにすぎない、と考えている。 表2 No.23の文書から分かるように、1931年に「休みを乞うた」ボロルダイという人物は、以前1925年にグケー爵の喇叭手に任命されている。バトジャブらが任命された年月は不明である。
56	1948.8.25	Dayamal	Dalantai (Meyiren級)	Āingli (Janggi級)	
57	1948.9.6	Buriyečün	Qaljadai (Meyiren級)	Sedengdorji	
58	1948.9.21	Būriyečün	Engkebayar (Jäkiryučüi級?)	Delger(Meyiren級)	
60	1948.10.16	Dayamal	Dalantai (Meyiren級)	Manglai (Kündü)	
61	1949.1.3	Dayamal		Tömenöljei(小隊長)	
63	1949.6.3	Dayamal		Tömenöljei(小隊長)	
64	1949.6.3	Dayamal		Arbinkesig	
65	1949.6.3(?)	Dayamal		Buyančür (Jäkiryučüi級)	
66	19???.2.7*	Dayamal	Amurjiyal(Tayiji)	Bayasqu(Tayiji, Jäkiryučüi級)	
68	1950.3.12	Göküge	Muusir-a(Darqad)	Öljei(Darqad)	
69	1950.3.14	Jiloyučüi	Oljei(Darqad)	Tuγul(Darqad)	
70	1950.3.14	Nangsu Mingγatu	Čoyimpul ?	Jamsu Čoyimpul	
74	1950.3.24	Dayamal	Amurjiyal(Tayiji)	Bayasqu(Tayiji, Jäkiryučüi級)	

出典：Āinggis Qaγan-u Naiman Čaγan Ordu, 1998. 西暦年月日，但し，\*は閏月・陰暦月日。

所押印した。中華民國二十年辛未の秋の最後の月の二十二日<sup>6)</sup> (1931年11月1日)

興味深いのは、元の喇叭手ボロルダイと後任のバダラホの二人はいずれも「管旗章京銜」(Jäkiryučüi jerge) と称されている点である。もうひとりのグケーをつとめたバドジャブは「梅林章京銜」(Meyiren jerge) であった。管旗章京も梅林章京(副章京ともよぶ)も清朝時代と中華民國期における旗の官職名で、オルドス(伊克昭盟)の場合だと、ひとつの旗

#### その四 (No.42)

つづいてアラク・スウルデの祭祀者のひとり、喇叭手の交替を示す記録を見てみよう(Narasun & Vangčury 1998, pp.931-932)。

委員、札薩克多羅郡王ワンチンジャブ、旗務を協理し鑑別する一級の孔雀翎子をもつ聡明にしてかつ公正な大臣チョクジャラガル、旗務を協理し鑑別する協理タ

- 5) Alay Sülde-yin Mingγatu Narantai-yi kereg-ün učir. Mingγatu-yin tusiyal-ača bayilyγaγsan oru-du uridiyar Göküge Jaba-yi Mingγatu-yin albai-güičedgesügei kemen ilegekü nige bičig; dumdadu arad ulus-un qorin qoyadıγar on-u qabur-un terigün sar-a-yin qorin yisün-e:
- 6) Alay Sülde-yin Būriyečün Jäkiryučüi jerge Boruldai. Meyiren jerge Göküge Batuγab nar čilüge γuyuju γaruγaγsan oru-du Jäkiryučüi jerge Badaraqu-du Būriyečün čola. arad Oyunbilig-i Göküge talbiγu tusiyaqu jiyuqu bičig nige-dü tamaγa qoyar daruba: dumdadu arad ulus-un qoriduyar on. čaγaγčün qonin jil-ün namur-un segül sar-a-yin qorin qoyar-a.

イジ、一等銜、二級孔雀翎子をもつ忠誠なウイチン・ワンチクスレンらのところから、章京銜のホワシン、グケー・オユンビリグに命ずる件。少し前、管旗章京銜札蘭章京（参領）トゥメンバヤルが報告してきたなかで、「微小なる筆者が管轄する参領内の札蘭銜の（者）ジャンガらはつぎのことを申し出てきた。当旗内にある輝かしいアラク・スウルデの喇叭手で、札蘭銜のジャンガが休みを乞うて（職を）離れた。その代わりに同じく喇叭手部のなかから章京銜のホワシンを喇叭手として任命するように、と報告してきた諸事を（旗衙門に）上呈致す。できれば、上方の御配慮により、旧信任状を新しく更新し下賜してくれまいか」とあった。（そこで）報告通りに認め、章京銜のホワシンを喇叭手にする。グケー爵のオユンビリグに信任状を新たに渡すことにした。（新信任状が）届き次第、参領銜のジャンガ、バダラホ、ラマ・チョイジラクワ、バンディ・バラチュク、章京銜セドンドルジらを随丁（qamjiya）として起用し、毎年四季の祭祀、祭殿をはじめとする祭祀器具（を維持するため）

の費用を適切に運営し、古来のしきたりにしたが、尊い祭祀活動を維持するよう命じる。また、十三年に（一度）寅年に輝かしいアラク・スウルデの大祭のときに、喇叭手とグケー爵の者らは喜ばしい白檀製の喇叭を（アラク・スウルデのところに）招いて、古くからの規定で祭祀をおこなうことを（忘れることなく）銘記するように。このため、押印した信任状を渡した。中華民國二十九年庚辰年春の仲月の7日<sup>7)</sup>（1940年3月15日）。

「休みを乞うた」のはジャンガで、別の資料（表2 No.31文書）によれば、彼は1928年に喇叭手に任命されており、合計12年間祭祀者をつとめたことになる。ジャンガの後任には同じく「喇叭手部」のホワシンが任命され、かれはその後、1946年7月まで祭祀者をつとめたことが分かる（表2 No.53文書）。

祭祀者の人事交替は、旗の役人である札欄章京の方から札薩克多羅郡王への報告をうけておこなわれていたことがよみとれる。アラク・スウルデの祭祀者が旗の管轄下にあり、その祭祀活動に旗の役人たちが関わっていた

7) Vei Yüen. Jasay törü-yin Jiyön Vang Vangčünjab. qosiyun-u kereg-i tusalan ilγayči terigün jerge toyus otuy-a. mergen bolγumjitu töb yosutu Tayičung Čoyjirγal. qosiyun-u kereg-i tusalan ilγayči Tusalayči terigün jerge-yin jerge ded jerge toyus otuy-a Čing Joriγtu Vayijing Vangčuysereng nar-un γajar-ača Janggi jerge Qovasing. Göküge Oyumbilig nar-tu tusiyaqu-yin uçir. mönüken Jakiruyči jerge Jalan-u Janggi Tömenbayar-ün medegülügen dotur-a öčüken minu Jakirqu qariyan-u Jalan jerge Jangγ-a nar-un medegülün iregsen dotur-a qariyatu qosiyun-u Alay Sülde-yin gegegen-u Buriyečin Jalan jerge Jangγ-a čilüge γuyuju γaruγan oru-du mön Buriyečin ayimay dotur-a-ača Janggi jerge Qovasing-i Buriyečin čola talbiju jakidal qayiralaqu bolbau kemen medegülün iregsen el-e uçir-i ulamjilan qariγu medegülbe: oldabasu deger-e-eče örüsiyen toličaγu qayučin jiyuqu bičig-i sinedgen qalaγu olγun qayiralaqu bolbau kemen medegülün iregsen-i yosuγar bolγaju. Janggi jerge Qovasing-tu Buriyečin čola talbiju. Göküge Oyumbilig nar-tu jiyuqu bičig-i sinedgen olγun tusiyaba: kürügsen-eče uruγsi Jalan jerge Jangγ-a. Badaraq. Lam-a Čoyjirayba. bandi Balčuy. Janggi jerge Sedendorji ner-i qamjiya bolγan abču jil büri-yin dörben čay-un tayilya ba čomčuy büriyesü takil-un keregsel jüül-i jokis-i üjejü tesken γarγayulju erkim tayilya-du qayučin jirum-iyar keregseljü yabuqu-yi jakiqu-ača γadan-a. arban γurban jil-un tokiyalduqu bars jil-du Alay Sülde-yin gegegen-ü yeke tayilya deger-e Buriyečin Göküge-ten-ü bayas zandan büriy-e-yi Jalan abajiju iγayur-un yosuγar jirumlan tayiju yabuqu-yi medetügei kemen egün-ü tula tamaγa daruγan jiyuqu bičig tusiyaba: dum dau arad ulus-un qori yisüdüger on čayan Luu jil-ün qabur-un dumdadu sar-a-yin-sin-e-yin doluyan-a.

ことが反映されている。

アラク・スウルデには年間四つの季節にそれぞれ祭祀があり、「十三年に一度の寅年には大祭」がおこなわれることも示されている。大祭の際には喇叭手の参加が義務づけられていた（後述3.4.2参照）。

## 2.2.2 寅年の血祭について

「十三年に一度の寅年の大祭」は血祭(Doysiylqu Tayilya)ともいう。アラク・スウルデの寅年の血祭についての記録を見てみよう。

### その一 (No. 1)

まず同治年間の記録を見ておこう(Narasun & Vangčuy 1998, p.219)。

輝かしいアラク・スウルデを寅年に新しくする際に使用すべき諸種(の用品の)値段、数量を決定し、ミンガトのザンプ、ドガルジャブらに伝える令状ひとつ。同治四年?年15日<sup>8)</sup>(1865年)。

「十三年に一度」寅年にスウルデを新しくすることをトンガホ(tungyaqu)という。新しいスウルデに血祭を捧げる。スウルデを更新し、血祭をおこなう際の費用調達には、旗衙門が直接関与していたことを物語っている。血祭はオトク旗をはじめ、オールドス・モンゴルの一大政治的な行事であったため、オトク旗衙門は相次いで発令していたことが表

1 (No.1-5) からうかがうことができよう。これらの発令は翌1866年(丙寅)の血祭のための事前準備であったにちがいない。

### その二 (No. 7)

つぎは、血祭をめぐる、オトク旗の札薩克多羅郡王ガルザンルマワンジャルジャムソ(1903-1939在位)からハンギン旗の札薩克に出された手紙である(Narasun & Vangčuy 1998, pp.702-703)。

札薩克多羅郡王、小弟ガルザンルマワンジャルジャムソから、御前大臣札薩克貝勒ノヤンたる兄に安泰をお祈りすると同じに報告する。古来から当旗領内でつつしんでまつてきた輝かしいアラク・スウルデには寅年ごとに冬の仲月の三日に一度血祭を捧げ拜んできた。その習慣にしたがい、弟たる筆者は(今度の)大祭において精進勤根し、当旗領内に住む貴旗の平民バートルに梅林銜の称号を与えた。どうかその通りに認めてくれまいか。このために安寧を祈り、報告した(中華民国三年)冬の仲月の15日吉日<sup>9)</sup>(1914年12月31日)。

1914年は甲寅年で、このときの血祭で領内に居住するハンギン旗所属の人物バートルに、梅林銜の称号を与えた、と表明している。清朝末期から中華民国時代にかけて、さまざまな原因で他の旗に移り住む者が増えていた。

8) Alay Sülde-yin gegegen-i bars jil-dü tungyaqu tuqai keregsebesü jökiqū jüil-ün ün-e toya-yi toya-yaju Mingyatu Zanbu. Duyarjab nar-tu ilegekü bičig nige: Bürintü Jasaγči-yin dörbedüger on-u □□ sar-a-yin arban tabun-a.

9) Jasaγ törü-yin Jiyön Vang öčüken degüü Falzangrulmavangjiljamsu-bar sidar sayid Jasaγ beyile noyan aq-a tan-a amuyulang-i ayiladqaqu-yin tasiram-du medegülkü anu ijaγur-ača qariyatū qosiyun-u nutuytu erkesigülün orusiyluγsan Alay Sülde-yin gegegen-i bars jil tokiyalduqu büri ebül-ün dumdadu sar-a-yin sin-e-yin γurban-a nigen udaya doysiyluγ ačılan mörgügseger iregsen-i jirumlan degüü minu bey-e edüge eyin kü yeke tayilya deger-e bisilyaju man-u qosiyun-u nutuytu sayıγa büküi erkim qosiyun-u arad Bayatur-tu Meyiren jerge šangnan oduyuluγsan-i keb-iyer yabuylqu bolbau: egün-ü tula amuyulang-i ayiladqan bariylba: (dumdadu arad ulus-un γurbaduγar on) ebül-ün dumda sar-a-yin arban tabun-u sayin edür-e.

このような者は移住先の旗と元の旗の両方に税金を払い、移住先の旗で役人等に採用される場合は、元の旗の許可を得なければならなかった。この記録はそのような歴史を裏づけているといえよう。

寅年の血祭は、陰暦11月3日におこなわれ、この際「梅林」のような称号を祭祀関係者に与えていた。アラク・スウルデの血祭のときに、特定の人物が何らかの名誉ある爵号もしくは称号をチンギス・ハーンの直系子孫たる支配者から下賜されていた慣例があったのではないかと推察できよう。

### 2.2.3 祭祀に関わる貴族タイジの任命について

アラク・スウルデの祭祀活動に、チンギス・ハーンの直系子孫タイジたちはさまざまなかたちで関わっていた。以下の文書(No.10)はそれを語っている(Narasun & Vangčuy 1998, pp.702-703)。

……令状が届いたら、あなた自らこの冬の仲月の三日の前にアラク・スウルデの祭殿に行き、(祭祀に参加した)あと(スウルデから祝福された)絹布、恩賜を旗衙門に届けるように、と二等タイジのブリンユベルに送る礼状ひとつに押印した。中華民国五年丙辰年冬の最初の月の二十二日<sup>10)</sup>(1916年11月17日)

冬の最初の月すなわち陰暦10月22日に出されたこの令状は、翌月すなわち「冬の仲月の三日」におこなわれる祭祀に参列させるタイジに渡すことになっている。別の資料、No.66の文書では、冬の祭祀を「皮綱祭」(Tasm-a-yin yeke tayilya)と表現している

(Narasun & Vangčuy 1998, p.1033)。「皮綱祭」に参加するタイジは、いわばチンギス・ハーン一族の代表である。同じオトク旗領内にあったチンギス・ハーンの末子トロイ・エジン祭においても、必ずタイジの参列が慣例となっていた(楊1996, pp.640-641)。

参列したタイジは、スウルデの祭祀において捧げられた供物類の一部を恩賜として旗衙門に届けなければならなかった。No.10, No.13, No.16, No.18, No.21など複数の資料を検討した結果、このようなタイジは毎年任命していたことが明らかである。毎年ちがう人物を任命する制度によって、広くチンギス・ハーン一族の子孫たちに祭祀への関与を促していたにちがいない。

### 2.2.4 祭殿の更新と整備について

つぎに、オトク旗衙門をはじめ、祭祀者のダルハトたちがいかに祭殿を維持し、整備してきたかを見てみよう。

その一 (No.12)

これは、旗衙門からアラク・スウルデのミンガトに出された令状である(Narasun & Vangčuy 1998, p.729)。

輝かしい主君たるアラク・スウルデの祭殿の覆い、(宮帳を固定する)縄などの類が古くなったため、大勢の施主から寄付を集めて修理し、更新するように。(修理作業が)終了したあと、票や文書を旗衙門に届けるように、とってミンガト・ナランタイらに命ずる票・文書ひとつ。中華民国六年丁巳年春の仲月の六日<sup>11)</sup>(1917年2月27日)

アラク・スウルデの祭殿はチョムチョクと

10) ……kürümegče činu bey-e en-e ebül-ün dumdadu sar-a-yin sin-e-yin ħurban-u urid Alay Sülde-yin qoruyan-a kürčü adis ħanggiy-a kesigi qoyisi medegülün iregülgütün kemen ded ħerge tayiji Bürmibel-dü ilegekü nige bičig-tü temdeg daruba: dumdadu arad ulus-un tabuduħar on. ulaħan Luu ħil-ün ebül-ün terigün sar-a-yin qorin qoyar-a.



よぶ宮帳であった。宮帳を固定させる縄類が古くなり、「大勢の施主たち」すなわち一般牧民からの寄付で修理せよ、との命令である。もちろんこの他に旗衙門も一定額の援助はしていたが、牧民からの寄付を集めることによって、大衆と祭祀活動とのつながりを強化させようとするねらいがあったであろう。ちなみに表2で示したように、命令をうけたミンガトのナランタイはかの59年も在職した人物である。

### その二 (No. 8)

つぎの文書は、アラク・スウルデの一部を構成する喇叭の祭殿や、祭祀器具類の更新を命じたものである (Narasun & Vangčuy 1998, p.705)。

輝かしいアラク・スウルデの十三年に一度 (おこなわれる) 大祭のときに、招いてきて演奏する白檀製の喇叭 (がある)。その祭殿や祭祀器具類を更新するように、とって管旗章京銜グムブジャブらに命ずる信任状ひとつに二箇所押印した。中華民国四年、乙卯年春の仲月の一日<sup>12)</sup> (1915年3月16日)。

アラク・スウルデの祭祀体系の一部を構成する喇叭は、ふだんはアラク・スウルデとは別の地方でまつられていた。「十三年に一度」の寅年の血祭のときに喇叭もアラク・スウルデのところに運ばれる。表2 No.23の文書で明らかのように、文書に登場する管旗章京銜グムブジャブの職掌は喇叭手で、1925年2月に交替している。

### その三 (No.73)

アラク・スウルデの最後の血祭、1950 (庚寅) 年の大祭に関する記録はつぎのようになっている (Narasun & Vangčuy 1998, p.1038)。

管旗章京銜ジャルグチ<sup>13)</sup>・プリンテグスに送った。用意し、届けてもらう事を命じて送る件。この度十三年に一度の寅年に輝かしいアラク・スウルデに血祭を捧げ、(スウルデの竿などを) 更新する際、ジャルグチたる貴方が竿の木を責任をもって入手するよう、との令状を命じて送った。(令状が) 届いたら、ジャルグチたる貴方は木を選ぶとき、細い先端が五寸程度で、太陽にあたっていた南面に印をつけて (おくように)。また、傷のない長さ三十三尺あまりの木を二本

11) Alay Sülde ejen gegegen-ü čomčuy-un büriyesü. čiyay-a-yin degesü jerge-yin jüil qaγučiraysan-i olangki öglige-yin ejes-eče nemeri duradqan iregüljü jasajayan sinedgejü güičeldügülüged kereg tegüsülegče el-e piyou bičig-yin qoyisi tusiyan iregülsügei kemen Mingγatu Narantai nar-tu tusiyaqu piyou bičig nige: dumdadu arad ulus-un jirγuduyar on. ulayčın moγai jil-un qabur-un dumdadu sar-a-yin sin-e-yin jirγuyan-a.

12) Alay Sülde-yin gegegen-ü arban γurban jil-ün yeke tayilya deger-e jalan iregüljü dayurisqayulday zandan Büriy-e-yin čomčuy ba takil-un keregsel jüil-i sinedgesügei kemen Jakiruyči jerge Gumbūjab nar-tu tusiyaqu jirγuqu bičig nige-dü tmayya qoyar daruba: dumdadu arad ulus-un dörbedüger on. kökegčın taulai jil-ün qabur-un dumdadu sar-a-yin sin-e-yin nigen-e.

13) ジャルグチとは「紛争」、「訴訟」で、〜チは職掌を意味し、ジャルグチは「紛争処理者」、「法律家」の意味である。オトク旗の老人たちに確認したところ、ジャルグチというのは、同治年間の回民反乱後の19世紀70年代以降に設置された役職だという。主として漢族と隣接する境界地帯の有志が任命され、漢族の越境入殖を監視する役であった。20世紀に入ると、オトク旗とウーシン旗のあいだにも境界をめぐる争いが多発するようになり、またオトク旗内部においてもカトリック教徒と仏教徒とのあいだにトラブルが増加した。ジャルグチもまたこのような新しい紛争を処理するようになった。要するに、ジャルグチは社会環境の激変により、多発する民間紛争を処理する役職である、と理解できよう。

用意したうえ、この秋の最初の月の十五日にスウルデの祭殿に怠慢なく届けるように、いざ使用する際には遅れることのないように。決して遅れて届けるなどしてはならないことを事前に嚴重に注意しておくように。このため、衙門から命じて送った。庚寅年春の最初の月の二十六日<sup>14)</sup> (1950年3月14日)。

「冬の仲月の三日」すなわち陰暦11月3日におこなわれる血祭の準備について、「春の最初の月」すなわち陰暦1月というかなり早い段階での発令である。具体的にはスウルデの新しい竿をつくるのに使用する木材を手配する内容である。その際、木材は傷口のない、長さ三十三尺(11m)の巨木を選ぶことになっている。それをスウルデにして立てるときには、木が生きていたときと同じように、陽面を日に向けなければならない。そのため、陽面には印をつけておく必要があった。

## 2.2.5 スウルデの周辺草原の開墾と祭祀活動の強化

1940年代になると、アラク・スウルデをとりまく社会環境は一段と悪化した。スウルデのあるオトク旗はオルドス地域の西、西北に位置し、長城と黄河をはさんで陝西省、寧夏と隣接する。そのため、1860年代から漢族の入殖、回民反乱に巻きこまれた。1930年代からはさらに共産党、日本軍勢力も加わり、オルドスの政治的、社会的環境は以前より複雑化した(楊1997, pp.8-12)。戦乱の長

期化にともない、陝西省や寧夏からの漢族農民の入殖が増加するようになる。草原が開墾され、ダルハトたちの生活基盤も揺るぎだした。以下の史料はそのような変化を示している。

### その一 (No.48)

まず、旗衙門は開墾状況を把握しようと動きだしている(Narasun & Vangčuy 1998, p.994)。

衙門の印璽を暫時管理する(管印)協理(タイジ)らの文書。ダーマル(3.3.2参照)のチャガンスムベルに送った。命じて伝える件:この度、伝わってきた話では、アラク・スウルデの祭殿の周辺にある沙漠や盆地等に作物をつくっているという。これを調べたところ、古来からスウルデの祭殿の付近一帯に農作物を作することを禁じてきた法令がある。そのため、この件について貴方に命じて文書を送った。届き次第、貴方はすでに開墾された草原を調べ、ハラ・セルベ等の地からスウルデまでの土地をいかなる名前の人物が勝手に作物をつくったのか、農民たちの名を詳しく報告し、(今後)禁止地域を開墾したことを取り調べるのにそなえよ。決して怠慢は許されない。このため、押印した令状を厳かに命じて送った。乙酉年春の最後の月の二十三日<sup>15)</sup> (1945年5月4日)。

アラク・スウルデの周辺一帯は古くから

14) Jakiruyči jerge jarγuči Būrintegūs-tū ilegebe: Beledgen iregūlkū-yi tusiyan jakiju yabuγulqu-yin učir edüge arban γurban jil nige udaya bars jil tokiyalduγulju Alay Sülde-yin gegegen-i doγsiγulun tung-γaγaju sinedgekü-dü silbin-ü modu-yi jarγuči činu bey-e-ber dayaγačilaγulun abuγulqu-bar bičig tusiyan yabuγulba: kürkül-e jarγuči činu bey-e eyin kü silbin-ü modu-yi silin abqu dotur-a narin üjügür tabun süng (imaqu) -ün kiri-tai büged naran-u tal-yi keb-iyer temdeglejü basa ču sirqa sorbi ügei γučin γurban jize ilegüü eyin kü qoyar urtu modu-yi beledgen abču ene namur-un terigün sar-a-yin arban tabun-u dotur-a sülde-yin qoruγan deger-e sayadal ügei kürger-e iregūljü erkim keregsekü-dü osultal ügei bolγasuγai: yerü osuldayulqu-du kürükülbesü uγtu ülü bolqu yabudal-i uridasun qamtuqa uqayulun jakiju egün-ü tula jasay-un ordun-u γajar-ača tusiyan ilegebe: čaγan bars jil-ün qabur-un terigün sar-a-yin qorin jirγuγan-a.

「禁地」(qoriγul-un γajar) とされていたにもかかわらず、1945年の時点ですでに開墾されてしまい、大量の漢族農民の入殖に衙門が有効な措置をとろうとしていた姿勢を垣間見ることができよう。1996年春に筆者がアラク・スウルデの祭殿の跡地を訪ねたときに目にしたのは、あたり一面の農耕地であった。遅くとも1945年ころからつづいた開墾の結果であろう。

## その二 (No.49)

漢族農民による草原開墾は、祭祀者ダルハトも含むモンゴル族牧民の生活に大きな影響を与えた。そのためか祭祀活動に専念できなくなったダルハトも現れるようになった。以下の資料はその具体的な証拠である (Narasun & Vangčuy 1998, p.996)。

旗衙門の印璽を暫時管理する (管印)  
協理 (タイジ) らの文書：

タイジで、管旗章京銜札蘭章京兼旗界  
官ダーマル (管事) のアムルジャラガル、  
ミンガトのアルタンゲレルらに送った。

命じて送る件：この度調べたところ、アラク・スウルデの祭祀 (を司どる) ヤムタト<sup>16)</sup>、ダルハトたちが、守護神スウルデから遠く離れて各地に住むようになってから、四季の大祭、日々の献香などことごとく荒廃してきた。そのためミンガトをはじめ、ヤムタトやダルハトたちをすべてスウルデの祭殿の近くに住ませる決定を文書で命じて送ろう。届き次第、貴方たちダーマル、ミンガトら自らのヤムタトやダルハトたちの家を訪問し、もれなく通達し、全員祭殿の近くに住み、毎日の献香や祭祀活動を欠かすことなくおこなうように。どうしても (各地に分散した祭祀者の) 人びとを口実を設けて (もとのところに) 集めないという事態にしてはならないということを共に説得して命ずる。このため押印した文書を命じて送った。中華民国三十四年乙酉年冬の仲月の五日<sup>17)</sup> (1945年12月9日)。

15) Jasaγ-un ordun-u tamaγ-a-yi tūr qamiyarūsan Tusalaγči. Tusalaγči nar-un bičig: Daγamal Čaγansumber-tü ilegebe: tusiyan jakiju yabuγulqu učir. edüge jarčin sonusbasu Alay Sülde-yin qoruγan-u oyir-a büküi qoγuli-yin mangq-a tekün-iyer ki γajar-i tariyan üiledjü bui kemejükküi: egün-dü bayičaγabasu. erte ijaγur sülde-yin qoruγan-u oyir-a dergede tariyan üiledkü-yi qoriγlan idqasγaγar iregsen jirum bui tula egün-i čimadu bičig tusiyan yabuγuluy-a: kürümegče činu bey-e sibten yabuγu teyin kü tariyalaysan γajar-i bayičaγan üjejü Qar-a Serbe jerge-yin γajar-ača dotuγsi ken ner-e-dü kümüs dur-a-bar taribasū tuqai-du tariyalayčid nar-un ner-e-yi tus tus medegülün irejü qoriγul-un γajar tariyalaysan-i kinan bayičaγaqu-du beledgesügei: yerü qayisi kereg-tü üjejü čalaγardaγu ülü bolomui: egün-ü tula temdeg-tü bičig-i čingdalan tusiyan ilegebe: kökegčün takiy-a jil-ün qabur-un segül sar-a-yin qorin γurban-a.

16) ヤムタト：ヤムとは「濃い食べ物」すなわち恩賜を意味し、ヤムタトとは「大ハーンからの恩賜を持つ人びと」を指す。チンギス・ハーンの祭祀を運営する「五百丁の黄色いダルハト」、末子トロイ・エジンのダルハトはみなヤムタトと自称する (楊1996, pp.660-663)。

17) Jasaγ-un ordun-u tamaγ-a-yi tūr qamiyarūsan Tusalaγči. Tusalaγči nar-un bičig: tayiji büged Jakiruy-či jerge Jala(n)-u Janggi Jarγuči Daγamal Amurjirγal. Mingγatu Alta(n)gerel nar-tu ilegebe: tusiyan jakiju yabuγulqu-yin učir. edüge bayičaγabasu Alay Sülde-yin tayily-a-yin Yamutad Darqad nar sülde sitügen-eče qola jüg büri-dü saγūsan-ača dörben ularil-un tayily-a takily-a. čay ürgülji-yin sang takil ali ču jüül qayisi kereg boljuqu: eyimü-yin učir Mingγatu ba Yamutad Darqad nar-i čöm qoruγan-u oyir-a dergede gerlen saγulyaqu-bar toγtamjilγad egün-i bičig tusiyan yabuγuluy-a: kürkül-e Daγamal Mingγatu tan-u beyes tayily-a-yin Yamutad Darqad nar-un ayil ger-üd-i čöm dutal ügei jarlan sülde-yin qoruγan-u oyir-a dergede gerlen saγulyaju čay ürgülji-yin sang takil tayily-a takily-a-yi tasural ügei ariγun čeber ali sayitur güüčedgettün: kerkibečü

旗の協理タイジから祭祀者集団の長官ミンガトラに出されたこの令状は、極めて厳しい内容を伝えている。先のNo.48の文書で一例を示したように、祭殿付近の開墾により、生活の基盤を失った祭祀者たちは遠くへと避難していった。当時、オルドス全域が漢族入殖の波にさらされていたため、祭祀者集団の結束がゆるぎだしたことは、チンギス・ハーンの八白宮と末子トロイ・エジンの場合も例外ではなかった（楊1996, p.676）。オトク旗衙門から出された厳しい命令も、ダルハトたちの離散にはどめをかけることはできなかったであろう。

以上、アラク・スウルデに関する文書資料のなかから、内容上もっとも代表的なものを呈示してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

第一、祭祀者たちの新しい職掌への就任には、旗の役人による推薦を経て、旗衙門の承認が必要であった。職掌の在任期間はまちまちであった。

第二、毎年冬の大祭には、必ずチンギス・ハーン一族の直系子孫たるタイジ身分の者が参列しなければならなかった。この人物には祭祀の結果を旗の札薩克に報告する義務があった。

第三、アラク・スウルデ祭祀のなかでもっとも重要なのは、「十三年に一度の寅年の血祭」であった。旗衙門からは早い段階で準備の命令がつぎからつぎへと配布されており、重視の姿勢が前面にでていいる。大祭にともなう、祭殿の更新も慎重にすすめられていた。

つぎに実際に祭祀活動にたずさわっていた祭祀者たちの情報にもとづいて、かつての祭

祀状況を再現してみよう。

### 3 祭祀者が語るアラク・スウルデの実態

まず、以下でいう「アラク・スウルデ祭祀」には、スウルデと喇叭（Bürüy-e）の二つが含まれることをことわっておきたい。アラク・スウルデと喇叭はふだんはそれぞれ異なる場所でまつられ、寅年の大祭のときにのみ喇叭の方がアラク・スウルデの祭殿に運ばれて、共同の祭祀がおこなわれる。場所が離れていても、あくまでも喇叭がスウルデの一部であることに変わりはない。オルドス地域エジンホロー旗（旧ジュンワン旗）でまつられてきたチンギス・ハーンの軍神とされる黒いスウルデも、スウルデと喇叭から構成されている（Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.289, p.308, pp.330-332）。スウルデ祭祀には喇叭が吸収されたかたちとなっている。

ダルハトたちは、「スウルデとは戦いの守護神で、喇叭はその守護神の号令を発するもので、そのためスウルデと喇叭はひとつの神器である」と見ている。ロブサンダンジンの著した『黄金史』第268節にはチンギス・ハーンの死後、その遺体を運ぶ途中、スニト部のギルーン・バートルの読みあげた「チンギス・ハーン挽歌」が収録されている。その挽歌には「赤褐色の種雄馬の鬣でつくられた貴方の纛とスウルデ、貴方の号令を出す太鼓とラッパ」とある（Lubsangdanjin 1990, p.127）。年代記の記述から見れば、スウルデと喇叭の結びつきは非常に古いのではなからうか。

#### 3.1 アラク・スウルデの移転

アラク・スウルデがまつられていた場所について、宣教師ヴァン・ヘッケンは、「オト

1. qayisi kereg-tü üjejü. arɣa siltay ɣarɣan ayil ger-üd-i ülü iregülkü-dü kürügülbesü uɣtuda ülü bolqu yabudali uridasa qamtuda uqaɣulun jakijü egün-ü tula temdeg-tü biçig tusiyan ilegebe: dumdadu arad ulus-un ɣučin dörbedüger on. kökegčün takiy-a jil-tün ebül-ün dumdadu sar-ayin sin-e-yin tabun-a.

ク旗ナンソ寺の近く」と伝えている (Van Hecken 1963, p.150)。サインジャラガルらは「チャガントロガイ公社 (郷) ナンソ大隊 (村)」としている (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.334) が、行政組織上はマルト公社 (郷) スウルデ大隊 (村) の方が正確である (地図参照)。かつてアラク・スウルデはナンソ寺の近くにあったから、人びとは「ナンソ寺の近くのアラク・スウルデ」と表現していた。ナンソ寺はオルドスの名刹で、乾隆年間にはすでにその名が知られていた (Mostaert 1956, pp.86-87)。『内蒙古自治区地名誌・伊克昭盟分冊』では、「マルト郷の政府所在地から西南へ9キロのところにアラク・スウルデの遺跡がある」としている (『伊克昭盟地名誌』編纂委員会 1986, p.389)。

「八つの白い天幕」で構成されていたチン

ギス・ハーンの祭殿八白宮の代わりに、固定建築の新しい祭殿が1956年にエジン・ホロー旗に完成した。それまでオトク旗でまつられていたアラク・スウルデをはじめ、オルドス各地にあった祭殿 (čayan ordun) がごとく新築のチンギス・ハーン祭殿に収められた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.376-381)。筆者のインフォーマントたちは、「アラク・スウルデは、当時の自治区政府の最高指導者ウラーンフの命令でとりあげられた。ダルハトたちの同意も得ていなかった」と証言した。喇叭も同じ時期にエジン・ホロー旗へ運ばれた。

筆者は1996年3月中旬にアラク・スウルデの跡地を訪ねた。跡地にはレンガが一面に散乱し、祭殿を囲んでいた柵の跡も確認できた。跡地は北にブルハン・トロガイ (Burqan



地図 アラク・スウルデ祭祀に関連する地域

Toluyai, 神の峠) を背に, 西にはササイン・ホーライ (Sasa-yin Qoyulai, 塔のある谷) という平地があり, 東にはクレー・トロガイ (Kürei Toluyai, 柵のある峠) がのびやかに広がっていた。南には「大水利」という漢族の農場が展開されている。1945年ころにスウルデの近くが開墾されているという報告があり, 旗衙門が調査にのりだしていたことは2.2.5で述べた。50数年間の歴史の変遷を「大水利農場」が端的に表している。跡地の近くにウクルチン部 (Ükürčin Oboy) の牧民が数戸住んでいる。跡地のある一帯を現在スウルデとよぶ。

一方, アラク・スウルデの喇叭は, マルト郷スウルデ (Maltu-yin Sülde) とよぶ場所から北西へ約90キロ離れたブラク郷ウーティのブルテゲ (Uuti-yin Bürtegei) という地に1956年までまつられていた。筆者が確認したところ, 北西から南東へ流れる尻無し河の東岸の丘にかつて「喇叭の祭殿」(Büriyeyin čayan ordu) があった。現在, 祭殿の近くに喇叭のダルハトで, タングート・ボーソルの息子ムンケが住む。

ダルハトたちによると, 1870年代の回民反乱の前, アラク・スウルデとその喇叭はオールドス地域の北西部, 黄河に近いハンガイ山地<sup>18)</sup>で長くまつられていたという。ハンガイ山地は黄河をはさんで寧夏の靈武と接していたため, 靈武周辺が回民反乱軍の拠点と化した時点で, オールドス地域のハンガイ山地は真っ先に被害をうけた。回民反乱をさけて, ハンガイ山地から東のチグアト・オボー (Čibayatu-yin Oboya), ウーティへ移転したのである。チグアト・オボーからナンソ寺付近に移転したあとも, チグアト・オボーは保護され, 祭祀活動もつづいた。No.20, No.26,

No.29, No.46, No.56など複数の文書がチグアト・オボーの祭祀状況を伝えている。

### 3.2 インフォーマントと祭祀者集団

筆者は1996年春にオトク前旗と後旗を訪れ, アラク・スウルデについて実地調査をおこなった。その際, 筆者のインフォーマントになったのは, 以下の祭祀者たちである。以下に述べる祭祀者たちの爵位と職掌に関する情報はすべてインフォーマントたち自身の認識に依拠していることを強調しておく。

ボーソル氏

(Bosur, 1996年当時67歳, 写真1)

オトク後旗エルケト郷 (Erkegütü somu) エルケト村のマーシンプリド (Masinbüridü) という地に住むボーソル氏は, ボロヌート部 (Borunuγud Oboy) の出身である。ボーソル氏の記憶している系譜を以下のとおり示した。

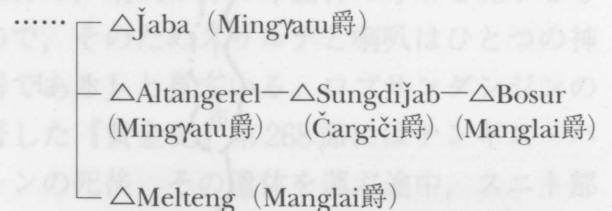


写真1 アラク・スウルデの祭祀者  
ボーソル氏

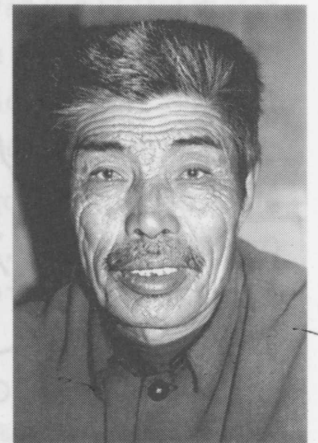


写真2 アラク・スウルデの祭祀者  
ラシノル氏

18) 19世紀末に漢族農民のオールドスへの入殖は, 黄河沿岸に沿って浸透する形で進められてきた。そのため, 黄河沿岸のハンガイ山地は漢族が集中する地域となった。共産党政権が成立したあと, 多数の囚人が送りこまれた。入殖漢族と囚人たちはハンガイを上海と表記した。現在, この地域は行政上「上海廟牧場」となっている。

表3 歴代ミンガト

番号	人名	在職期間
6	Boru	~1875.1.2
6, 40	Narantai	1875.1. 2 ~ 1933.2.23
40	Jaba	1933.2.23 ~ ?
54	Jabaの弟Altangerel	? ~ 1948.5.1
54	Altangerel	1948.5. 1 ~ 1950.3.14
70	Čoyimpul	1950.3.14 ~ ? (1960年死去)
	Erkembayar	? ~ 1956

出典：Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu, 1998; Bosur氏のインタビュー。

ボーソル氏によると、祖父アルタンゲレルとその兄ジャワーは二人ともミンガトであったという。ミンガトはアラク・スウルデの祭祀者集団ダルハトのなかで、もっとも位の高い爵である。もうひとりの祖父メルテンはマンライ爵であった。ボーソル氏は筆者に歴代ミンガトの名を挙げた。それは表2「アラク・スウルデの職掌をめぐる人事」に見られるミンガトたちの登場順番と完全に一致していた。ボーソル氏の情報と文書記録にもとづいて作成した「歴代ミンガト」が表3である。

ボーソル氏がダルハトになったのは17歳のときであった。祖父アルタンゲレル、祖父の弟メルテンの二人がそれぞれミンガトとマンライから退いたときに、旗衙門によってマンライに任命された。若かったためミンガトにはなれなかったという。表2 No.54の文書で明らかのように、ジャワーの弟アルタンゲレルがミンガトをやめたのは1947年5月1日である。数え年をとるモンゴルの習慣で、ボーソル氏が17歳になっていたのは事実である。ボーソル氏はムーシャル (Muusir-a) という人物に弟子入りし、祭祀者としての訓練を受けた。表2 No.44, No.68の文書が示すように、ムーシャルは1950年3月12日付でゲケー爵から退いている。

ボーソル氏の祖父アルタンゲレルの兄ジャワーは1933年2月23日付でミンガトになっ

ているが、アルタンゲレルがミンガトになった年月を示す文書はない。

ラシノルー氏

(Rasinorbu, 1996年当時64歳, 写真2)

オトク前旗ブラク郷 (Bulay somu) ウーティという地に住むラシノルー氏は、トゥクチン部 (Tuyčin Oboy) の出身で

ある、と自称する。トゥクとは旗幡で、「~チン」は職掌を表し、トゥクチンとは「旗手」の意味である。軍神とされる黒いスウルデ、モンゴル帝国の象徴たる白いスウルデの祭祀者集団にも「旗手」と称する職掌集団がある。かれらは本来さまざまな父系親族集団 (oboy) から構成されていたが、祭祀活動に長く従事したため、固有の父系親族集団名を忘却し、職掌名を父系親族集団名として名づけるようになった (楊 1999, pp.149-154)。ラシノルー氏の場合も同じではないかと推察する。というのは、ラシノルー氏は筆者に、アラク・スウルデの祭祀者ダルハトは全員トゥクチン (旗手) であると主張した。かれは同じ祭祀者であるボーソル氏がボロヌート部の出身であることを知らなかった。ラシノルー氏が記憶する系譜は以下のとおりである。

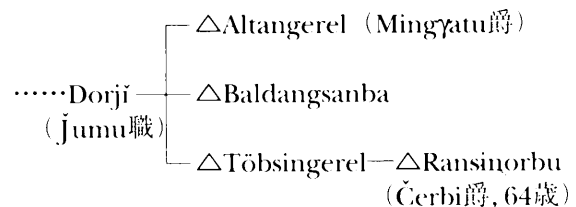


表2 No.52の文書が示すように、ラシノルー氏の祖父ドルジは1946年5月25日付でジュム職に任命されている。さらに、先述のボーソル氏の情報、表2と表3から分かるように、ラシノルー氏の祖父アルタンゲレルは1947年5月1日付でジャワーの弟アルタンゲレル

の後任として、ミンガトになっている。この二人のミンガトは、偶然にも同じ「アルタンゲレル」という名前をもっていた。

ラシノルー氏は16歳のときに旗衙門によってアラク・スウルデのチェルビ職に任命されたという。

ポーソル氏もラシノルー氏も、自分たちは「アラク・スウルデの祭祀者ダルハト」(Alay Sülde-yin Darqad)であると自称する。旗衙門からダルハトに任命された委任状は黄色い絹布に書かれたもので、文化大革命のときに没収されるまで保存していたという<sup>19)</sup>。アラク・スウルデのダルハトはまた「旗ダルハト」(Qosiyu Darqad)ともいう。この「旗ダルハト」の由来に関する見解は分かれていた。ポーソル氏は、自分たちはチンギス・ハーンの八白宮と軍神とされる黒いスウルデをまつ「五百戸の黄色いダルハト」と同じく、元朝のときからつづく集団であるという。1870年代に回民反乱軍がオルドスに侵入し、アラク・スウルデの祭祀者集団が一時的に離散した。反乱がおさまったあと、旗衙門はダルハトの組織再建に着手し、一部で再編成されたこともある。それ以来、民間で「旗ダルハト」ともよばれるようになった。つまり「旗ダルハト」との呼び方は1870年代以降のこと、との解釈である。一方、ラシノルー氏は、清朝初期から旗が管理し任命権を所有していたため、「旗ダルハト」とよばれるようになったと説明した。チンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちも、ポーソル氏と同様の見解をもっていた(楊1996, pp.660-663)。筆者はポーソル氏の見解に賛同する。モンゴルの歴代ハーンは、それぞれ功績者をダルハトに任命してきた。このことをチンギス・ハーンの八白宮祭祀のときに唱

えられる祭史ウチュク(Öcig)と「黄金の恩賜」(Altan Tügegél)から確認できる(Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.103-104, 楊1995, pp.30-31)。清朝時代にも旗札薩克がダルハトを任命していた、との記録もある(Narasun & Vangčuy 1998, pp.121-122)。

ムンケ氏(Möngke, 1996年当時47歳)

オトク前旗ブラク郷のウーティに住むムンケ氏は、タンゲート部(Tangyud Oboy)の出身である。ムンケ氏の父ポーソル(1993年に73歳で死去。上記ポーソルと区別するため、タンゲート・ポーソルと表記する)は、1956年までアラク・スウルデの喇叭をまつっていた。ムンケ氏自身は喇叭の祭祀およびアラク・スウルデ祭祀における喇叭の役割を見たことはないが、父親のタンゲート・ポーソルから聞いた知識を筆者に語った。

ムンケ氏によると、アラク・スウルデの喇叭手(Büriyečin)はもっぱらタンゲート部がつとめていたという。喇叭手をつとめるタンゲート部は、「上喇叭手タンゲート」(degedü Büriyečin Tangyud)と「下喇叭手タンゲート」(douratu Büriyečin Tangyud)の二部に分かれていた。タンゲート部の内部にはさらにバーレン・タンゲート(Bayareng Tangyud)、ダシュク・タンゲート(Dašuy Tangyud)など複数のサブ・グループがあるという。オトク後旗チャブ郷あたりは、タンゲート部がもっとも集中する地域で、「チャブの五百戸のタンゲートたち」(Čab-un tabun jayun Tangyudud)という名で知られていた(写真3)。周知のとおり、オトク旗は西夏の故地であった。この地にタンゲート部がいまだに大集団を形成している現象は、注目すべきであろう<sup>20)</sup>。いずれにしてもムンケ氏は

19) 八白宮の「五百戸の黄色いダルハト」は、フビライ・セチェン・ハーンが「黄色い書」(sir-a bičig)に任命状を書いたことから、「黄色いダルハト」と称するようになったという(Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.415)。黄色は権威と結びついている。

20) モンゴル人はチベットをタンゲートとよぶこともあるが、ここでいうタンゲートはモンゴルの父系親族集団オボクのことである。



筆者に、タングート部とアラク・スウルデの喇叭とのつながりを強調していた。

バダマ氏 (Badma, 1996年当時71歳)

バダマ氏はアラク・スウルデのダルハトではなく、同じくオトク旗にあったチンギス・ハーンの末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトである。ウルルグート部 (Örlögüd Oboj) の出身で、現在シャルブリドという地に住む。筆者は以前バダマ氏の提供した情報にもとづいて、トロイ・エジン祭祀とチンギス・ハーンの八白宮祭祀との関連について論じたことがある (楊1996, pp.635-708)。

アラク・スウルデの祭祀には、トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちも積極的に関わっていた。詳しくは3.3.2で述べるが、アラク・スウルデの寅年の血祭におけるトロイ・エジンのダルハトたちの役割についての情報は、バダマ氏によるものである。

チョグルブ氏 (Čoγrub, 1996年当時70歳)

マルト郷 (Maltu somu) に住むチョグルブ氏は、アクタチン部 (Aytačin Oboj) の出身である。アクタとは去勢馬を指し、「～チン」は、職掌を表す。チョグルブ氏の父はムーシャル (Muusir-a), 兄はウルジナソン (Öljeyinasun) で、二人ともアラク・スウルデの祭祀者ダルハトであった。その名を表2のNo.44, No.68の文書から確認できる。先に述べたボーソル氏はチョグルブ氏の父ムーシャルの弟子であった。

チョグルブ氏は幼少のときに出家して僧になっていたが、父と兄の影響をうけてアラク・スウルデ祭祀に熱心に参加した。1938 (戊寅) 年と1950 (庚寅) 年の血祭を見たことがある。チョグルブ氏の事例から、アラク・スウルデの祭祀者集団から出家する者もいたことが分かる。

チョグルブ氏の属するアクタチン部はアラク・スウルデと特殊な関係にある。アラク・スウルデの跡地から東へ約0.5キロのところ



写真3 オルドス地域オトク旗に居住するタングート部の人びと (1950年代)

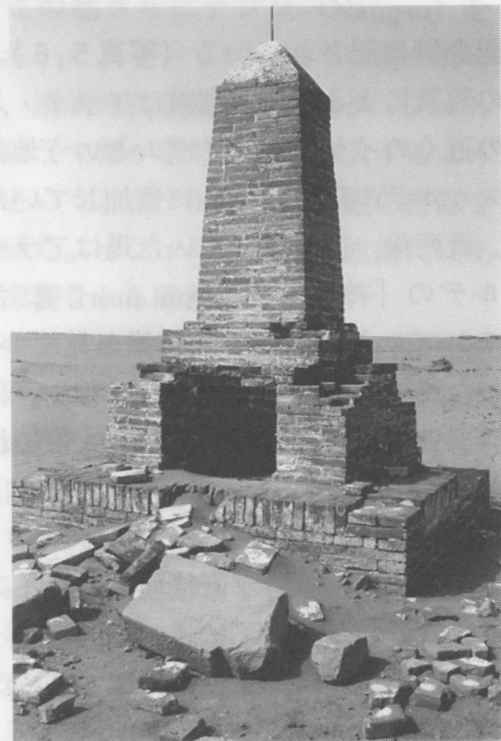


写真4 アラク・スウルデの近くに立つ「馬良誠・顧寿山の碑」

に、「馬良誠・顧寿山の碑」が立つ (写真4)。アクタチン部出身の馬良誠 (Aytačin Borubayatur, 1910-1948) は少年時代にオトク旗兵に参加し、馬富綱 (Aytačin Bayandorji, 1912-1989) や顧寿山 (1909-1947, Öljeyiqutuy) らとともに漢族の入殖に反対する運動 (Duyuyilang) に参加した。1948年に国民党張庭芝部隊との戦いで死亡 (『鄂托克旗誌』編纂委員会1995, pp.715-717, pp.942-943) し、1951年11月23日に顧寿山の遺体とともにアラク・スウルデの近くに埋葬されたこと



写真5 「馬良誠・顧寿山の碑」の残がい  
モンゴル語と漢語で二人の名前が刻まれている。

が、記念碑に記されている(写真5,6)。馬良誠の親族によると、馬良誠はアラク・スウルデの近くのイケ・チャイダムという地に住み、スウルデの祭祀に熱心に参加していたという。戦死後、彼が乗っていた馬はアラク・スウルデの「神馬」(ongyun mori)にされた。モンゴル人は馬良誠を英雄と見ている。戦死した英雄の馬をスウルデの「神馬」にするのは、古くからの習慣であるかもしれない。

上記4人には、筆者が直接面会し、インタビューをしている。以下に述べるアラク・スウルデの祭祀活動に関する情報はすべてこの4人から得ている。

### 3.3 祭祀者集団の職掌と管理体制

#### 3.3.1 職掌と爵位

アラク・スウルデの祭祀者たちは、自分たちの職掌はすべてかつての大ハーンの軍隊内の「軍職」(čirig-ün tusiyal)に由来すると主張している。祭祀者集団のなかで、グケーと

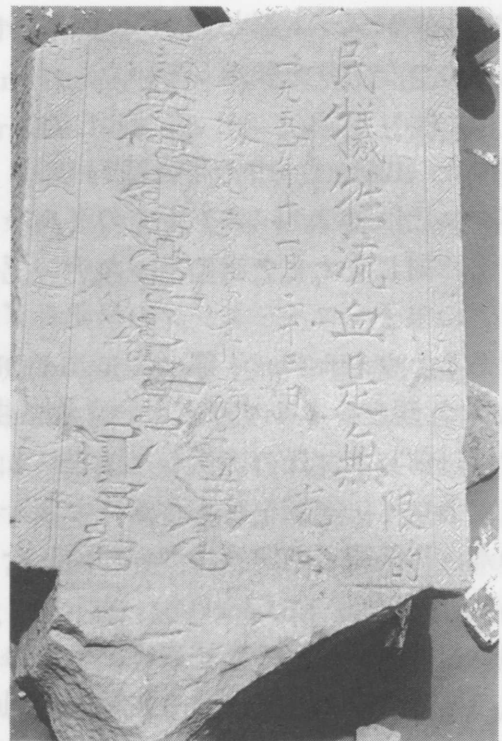


写真6 「馬良誠・顧寿山の碑」の残がい  
「人民のために流血し犠牲になるのは、永遠の光栄である」とある。

いう爵位をもつミンガトがもっとも位階の高い責任者であったという。

ダルハトたちの認識にもとづいて各職掌の役割を以下のように整理した。

(1) ミンガト (Mingyatu) : 祭祀者ダルハトの最高責任者、祭祀活動全般を指揮、運営する。かつての大ハーンの軍隊内の千戸長に由来し、清朝時代においては旗札薩克と同等の地位をもつ。祭祀のときに旗札薩克と並んで座る<sup>21)</sup>権利を有する。

(2) グケー (Göküge) : ミンガトにつぐ二番目に位の高い祭祀者。祭祀のときにスウルデにヒツジの丸煮を献上し、各種経文を唱える人。また旗札薩克など高位の参拝者を案内する係でもある<sup>22)</sup>。

21) 「五百戸の黄色いダルハト」の場合、ミンガトはフビライ・ハーンからダルハトに与えられた職位のひとつとされる。チンギス・ハーンの軍神黒いスウルデの祭祀者集団内の4番目のヤムタドで、チンギス・ハーンの軍隊組織に由来する爵位名、官職名である。また、一部のミンガトは二重の爵位を持ち、グケー・ミンガト、チェルビ・ミンガトと称していた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.438-439)。

22) グケーチン (Gökečin, Gökügečin) ともいう。「五百戸の黄色いダルハト」の場合、フビライ・ハーンから八白宮のダルハトに授けられた爵位のひとつとされる。祭祀のときに祭史 (öčig) を唱え、

(3) マンライ(Manglai):マンナイ(Mangnai)ともいう。スウルデをはじめ、祭殿全般の装飾や祭祀器具の製造を担当する<sup>23)</sup>。

(4) トゥール (Tuul, Tuuli):祭祀の進行係。またスウルデに酒を捧げる役も兼ねる<sup>24)</sup>。

(5) チェルビ (Čerbi):スウルデに酒を捧げる人<sup>25)</sup>。

(6) ホールチン (Qujurčün):祭祀のときに胡琴 (qujur) と琴 (yatur-a) を奏でる人。

(7) チャルギチン (Čargičin):チャルギ (Čargi) という祭祀用楽器を奏でる人。チャルギとは、マン (Mang, 大蛇) の頭をかたどった9本または11本の木板からなる楽器で、木板には「天のことば」(tngri-yin kele) が書かれていた。「天のことば」は逐次はつきりと読んではいけない。チャルギを鳴らすことは、「天のことば」を読むことと同じ意味をもつ。祭祀者ダルハトたちに大ハーンからの恩賜ヤム (yamu) を配るときにも、チャルギを鳴らす<sup>26)</sup>。

(8) ジローチン (Jiloyučin):アラク・スウルデに献上された「神馬」(ongγun mori) の世話をし、祭祀のときに神馬の手綱を手にもって立つ係である。筆者はこの「神馬」に関する詳しい情報を入手できなかったが、祭祀者集団内のアクタチン部と何らかのつながりがあるのではないかと想像している。

(9) スウケチン (Sūkečin):斧手との意味で、血祭のときに供物ヤギの角を叩く人。

(10) デグルチン (Degigürčün):デグルク (Degigürkü) とは片足で跳ぶことを意味し、デグルチンとは血祭のときにスウルデをもって片足跳びをする人のことである。

(11) ガブシューチン (Gabsiyučin):血祭のときに供物ヤギの血をスウルデに捧げる人。

(12) バートル (Bayatur):血祭のときにスウルデを運ぶ人。

以上はダルハトたちが語った職掌であるが、この他さらにナンソ (Nangsu) をあげる人もいた。ナンソは本来ラマ僧の称号であるが、清朝時代後期に、アラク・スウルデの祭祀にラマ僧が常時ひとり介入するようになったという。僧ナンソは、祭殿の掃除を担当していた。ナンソの任命権は旗衙門にあったことを表2から確認できよう。

オールドス地域にあるもろもろの祭祀活動の祭祀者たちは、八大ヤムタト (naiman yeke yamutad) の称号をもつ (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.440)。アラク・スウルデのダルハトたちも例外ではない。すでに冒頭で触れたように、ヤムとは大ハーンから下賜される特別の恩賜である。ヤムタトとは「恩賜保持者」との意味で、いわば祭祀者の特権を表す自称である。表4で示したとおり、アラク・スウルデの場合は、インフォーマントによってかつての八大ヤムタトの名称についての記憶が異なっていることが分かる。

大ハーンの詔勅を読みあげる人 (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.434)。

23) 「五百戸の黄色いダルハト」の場合、フビライ・ハーンから八百宮のダルハトに授けられた爵位のひとつとされる。祭祀活動の管理者のひとり (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.434)。

24) フビライ・ハーンから「五百戸の黄色いダルハト」に与えられた爵位のひとつ。モンゴル・ハーン国時代の爵位でもある。祭祀において供物の献上を担当し、儀式の進行係をつとめる (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.435)。

25) 「五百戸の黄色いダルハト」の場合、フビライ・ハーンから授けられた爵位のひとつとされる。主として献酒儀礼を担当するが、役に応じてさらにさまざまな呼び名がある (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.436)。一方、末子トロイ・エジンの場合、チェルビは祭祀用楽器を奏でる人、といわれていた (楊1996, p.661)。

26) 末子トロイ・エジンの祭祀においても、チャルギは「天のことば」を唱えるときに用いられる (楊1996, p.664)。

表4 ダルハトが記憶する  
アラク・スウルデの  
八大ヤムタト

Bosurの情報	Čoyrubの情報
Mingγatu	Mingγatu
Tuγčün	Tuγul
Göküge	Göküge
Manglai	Manglai
Čargičün	Čargičün
Čerbi	Quγurčün
Jילוγučün	Jילוγučün
?	Nangsu

チンギス・ハーンの八白宮と軍神とされる黒いスウルデの祭祀者である「五百戸の黄色いダルハト」たちは、爵位 (čola) と職掌 (tusiyal) は明確に区別されている。これに対して、現在インフォーマントたちが挙げるアラク・スウルデの八大ヤムタトの名称は、爵位と職掌とが混同されているのではないかと、との印象をうける。ここで、八白宮および軍神とされる黒いスウルデの祭祀者集団の社会構造 (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.432-470) を参考に、想定されるアラク・スウルデの祭祀者集団の爵位と職掌<sup>27)</sup>を表5に示した。

### 3.3.2 祭祀者集団の管理体制

アラク・スウルデの祭祀者集団が有する「旗ダルハト」の身分は世襲であった。この世襲制を裏づける資料のひとつとして、表2 No.68の文書を挙げることでできよう。ここでは、ゲケー爵のムーシャルが退いたあと、息子のウルジが後任になっている。インフォーマントたちによると、祭祀者ダルハトが死んだり、不祥事をおこしたりした場合、旗衙門が後任を選定するという。ただし候補はあくまでも「旗ダルハト」集団内にかぎられていた。

表5 想定されるアラク・  
スウルデの祭祀者集  
団の爵位と職掌

爵位	職掌
Mingγatu	Tuγčün
Tuγul (Tuul)	Quγurčün
Göküge	Čargičün
Manglai	Jילוγučün
Čerbi	Būriyečün
.....	.....

普通の牧民は必ずあるタイジの属民 (albatu) であったのちがいが、祭祀者ダルハトは免税の特権をもつ「自由の民」であった。身分上タイジの属民ではなかったが、タイジとのつながりは強固なものであった。その関係を「ダーマル (Dayamal 管事) 制度」からよみとることができよう。

ダーマル (管事) とは、貴族タイジが担当する祭祀の名誉的な管理職である。ダルハトからの情報と文書記録をあわせて検討した結果、以下の3点が判明した。

第一、アラク・スウルデの祭殿は四角い柵にかこまれていた。東西南北の四面にそれぞれひとりのタイジがダーマル (管事) になっていた。ダーマル (管事) には柵の維持と更新の義務があった。

第二、ダーマル (管事) には決まった任期がなく、たとえばバヤスホラン (Bayasγulan) やダランタイ (Dalantai) という人物らの事例が示すように、何回も任命されることがあった。No.27の文書で、寅年の血祭にそなえて、一度に4人をダーマル (管事) に任命していることから見れば、「十三年に一度の寅年」にダーマル (管事) 全員を交替させていたかもしれない。

第三、ダーマル (管事) 制度は、チンギス・ハーンの八白宮の祭祀者である「五百戸の黄

27) 以前考察した末子トロイ・エジンの祭祀者集団の場合も、インフォーマントによる爵位と職掌の混同があったのではないかと考えられるが、詳しくは表6を参照されたい。

表6 アラク・スウルデの祭祀者集団と他の集団との爵位比較

アラク・スウルデ の八大ヤムタト	八白宮の八 大ヤムタト	軍神黒いスウル デの八大ヤムタト	トロイ・エジン の八大ヤムタト
Mingγatu	Tayisi	Ĵayisang	Ĵayisang
Tuγul(Tuul またはTuuli)	Tayibuu	Čingsang	Manglai
Göküge	Manglai	Tümetü	Čerbi
Manglai	Qonĵin	Mingγatu	Darqan kiy-a
Čerbi	Göke	Ĵayutu	Otoγ irügelči
	Tuuli	Tuuli	Tuul
	Qasaγ-a	Čerbi	Galči
	Čerbi	Göke	Qonĵin

出典：ダルハトのインタビュー。Altan Ordun-u Tayibγ-a, 1983, pp.432-440.  
「オールドス・モンゴルの祖先祭祀」, 1997, pp.660-663.

表7 Rasinorbuが記憶するアラク・スウル  
デの八大ヤムタトとその最後の担当者

職掌名	最後の担当者
Dayamal	Bayasqu Tayiji (1951年死去)
Mingγatu	Čoyimpul (1960年代死去)
Göküge	Öljeinasun (その父はMuusir-a)
Čerbi	Rasinorbu (1996年当時64歳)
Manglai	Bosur (1996年当時67歳)
Ĵiloyučin	Ĵirantai
Tuγul	Ĵirantai
Nangsu	Ĵamsu

色いダルハト」内にもあった。それは清朝時代のなかばごろにダルハトの管理を強化するために、強制的に導入された制度であり、ダルハト自身がダーマル（管事）をつとめていた (Sayinĵirγal & Šaraldai 1983, p.441)。アラク・スウルデの場合、ダーマル（管事）という名称はやはり清朝時代の産物であろうが、タイジたちと祭祀とのつながりは、以前から存在していたにちがいない。

以上、祭祀者集団の爵位と役割分担、集団の管理体制などについて、主としてダルハトたち自身の証言にもとづいて述べてきた。なお、アラク・スウルデ、八白宮、軍神黒いスウルデ、末子トロイ・エジンの祭祀者集団を

表8 Rasinorbuが記憶する1950年  
代以前のダルハトたちの名前

Rasinorbuの情報	文書記録との照合
Muusir-a	No.44, 68
Bosur	
Tuγul	No.69
Öljei (nasun)	No.68, 69
Ĵaba	No.40
Altangerel	No.54
Gempil	No.33
Ĵamiyang	
Erkimbilig	
Perlei	

比較したのが表6である。また、ダルハトのひとりであるラシノルー氏が記憶する八大ヤムタトの最後の担当者を表7に、1950年代以前の「旗ダルハト」たちの名前を表8にそれぞれまとめた。また、文書記録に登場するアラク・スウルデ祭祀に関わっていたオトク旗の歴代ダーマル（管事）たちの名前を表9で示した。

つぎに、かれらのおこなっていた祭祀活動を再現してみよう。

表9 アラク・スウルデの歴代ダーマルたち

番号	年代	前任	後任	担当分野
9	1916.3.9	Banzarjab	Tarmirinčin	祭殿のダーマル (qoruyan-u Daγayamal)
11	1917.2.27	Yampil	Qaraküü	南側の柵のダーマル (urudu tal-a-yin qasiyan-u Daγayamal)
		Bürintegüs	Šanjimidub	北側の柵のダーマル
14	1918.6.13	Qaraküü	Borul dai	南側の柵のダーマル
15	1918.11.19	Tarmirinčin	Nimasereng	
20	1922.6.17	Bayasγulang	Qaljan	チグアト・オボアのダーマル (Čibayatu-yin Oboyan-u Daγayamal)
26	1920年代	Bayanboru	Bayasγulan	チグアト・オボアのダーマル
27	1928.2.26	?	Saranmanduqu Čayadai Temürbatu Čayančilayu	寅年の血祭にともなう任命
29	1928.3.11	Erkembayar	Čayančilayu	チグアト・オボアのダーマル
46	1944.2.20	Čayančilayu	Dalantai	チグアト・オボアのダーマル
50	1946.4.27	Norla	Dalantai	北側の柵のダーマル
56	1948.8.25	Dalantai	Čingli	チグアト・オボアのダーマル
59	1948.9.28	Dalantai	Manglai	北側の柵のダーマル
60	1948.10.16	?	Tömenöljei	東側の柵のダーマル
62	1949.6.2	?	Tömenöljei	東側の柵のダーマル
64	1949.6.3	?	Arbinkesig	南側の柵のダーマル
65	1949.6.3	?	Buyanvčir	西側の柵のダーマル
74	1950.3.24	?	Bayasqu	?

出典：Činggis Qayan-u Naiman Čayan Ordu, 1998.

### 3.4 アラク・スウルデの祭祀

アラク・スウルデの祭祀は、大きく「平時祭」と「寅年の血祭」という二つからなる。すでに述べたように、アラク・スウルデは1956年に「文物収集」の名目で政府によってオトク旗からとりあげられ、エジン・ホロー旗に建つ新築の八白宮内に納められた。血祭は、1950年の庚寅年を最後に、平時祭は1956年以降中断されていた。中国の改革开放政策の深化にともない、民族文化の復興も少しずつ軌道にのりだして以来、様子は一変した。戊寅年の1998年のとき、オトク前旗とオトク旗のモンゴル族の長年の強い要望に

答えるかたちで、アラク・スウルデは42年ぶりに一時的にもとの場所に帰還された。

戊寅年の1998年陰暦11月2日に、アラク・スウルデは八白宮を離れてウーシン旗経由でオトク前旗マルト郷にあるもとの場所に運ばれた。地元ではこれを「招請」(jalaqu)と表現していた。翌11月3日には盛大な血祭がおこなわれた。以下、祭祀者たちの情報にもとづいて、かつて1956年までに举行されていた平時祭と血祭の様子を復元するが、1998年の血祭およびその意義については、稿を改めることにする<sup>28)</sup>。

28) 1998年に復活された血祭については、2000年7月に刊行の「アルプス山とチンギス・ハーン」(『静

### 3.4.1 アラク・スウルデの形状と平時祭

#### アラク・スウルデの形状

ダルハトたちによると、アラク・スウルデは高さ27尺<sup>29)</sup>の檜であったという。檜には赤褐色の種雄馬の鬣でつくった垂房 (kögül) があり、垂房の下には三層の衣 (debel) が巻かれていた。この衣には9×9計81個の銅製もしくは銀製のボタンが縫いつけられていた。檜の竿 (silbi) には「千の目」(mingyan biligün) を描いていた。「千の目」は遠方を透視する威力をもち、敵を撃破する巨力を発揮するという<sup>30)</sup>。衣のなかには一枚の絹布画を入れる。絹布画には白馬に跨った武人の姿が描かれていた。武人をチンギス・ハーンだと説明するダルハトもいる。モンゴル帝国の象徴とされる白いスウルデの祭殿内にも騎馬武人の絵画が保存され、神聖視されていた(楊 1999, p.144)。いずれも絹布画をスウルデの神霊 (sülde-yin sakiyus) とする見方は共通しており、ある程度スウルデ祭祀に共通した特徴であるかもしれない。

スウルデはチョムチョク (čomčuy) とよばれる天幕のなかに立てられ、スウルデの檜が天幕の天窓から突きでていた。天幕チョムチョクの大きさは高さ、長さ、幅がそれぞれ3メートルで、外側を白いフェルトでおおい、内部には黄色いシルクを張っていた。天幕のまわりには4本の小スウルデ (elči sülde) が立っていた。天幕のかたちは丸みをおびた正方形、祭殿をチョムチョクとよぶ点は、チンギス・ハーンの祭殿八白宮と共通するものである。祭殿は四角い柵に囲まれていた。ダルハトたちの証言にもとづいて復元したアラク・スウルデの祭殿が図1であり、1998年に一時帰還されたアラク・スウルデは写真7のとおりである。

#### アラク・スウルデの平時祭

祭殿にはつねに数人のダルハトたちが宿直として駐在していた。昼夜「永遠の灯明」(mönge jula) をともし、朝と晩には献香を欠かさなかった。一年間を通して、つぎのような祭祀があった。

##### (1) 新年祭 (sin-e jil-ün tayilya) :

陰暦1月4日におこなわれる。祭祀者集団の最高責任者ミンガト自らがダルハトたちを率いて、スウルデに新年の挨拶をする。この際、前の年の12月に用意したヒツジの丸煮



図1 祭祀者の記憶にもとづいて復元したアラク・スウルデの祭殿



写真7 1998年に八白宮から「招請」され、もとの場所に立ったアラク・スウルデ  
写真提供——サインジャ (賽音吉亜)

岡大学人文論集』51号, pp.27-77) で述べている。

29) 一説では33尺。1mは3尺にあたる。

30) サインジャラガルらによると、軍神黒いスウルデの場合は、スウルデの衣に千個のボタンを縫いつけ、これによって「千の目」を表現したという。アラク・スウルデは「千の目」を竿に描いている点で、黒のスウルデと異なるという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.287, p.336)。

をひとつ献上する。

(2) 春季大祭 (qabur-un yeke tayilya) :

オルドス暦<sup>31)</sup>の6月(陰暦3月)21日におこなわれる。一般の参拝者も参加し、ヒツジの丸煮を4つ捧げる。

(3) 夏當地の大祭 (jusalang-un yeke tayilya) :

オルドス暦の8月(陰暦5月)6日にダルハト全員でおこなう。その年生まれの雄の仔ヒツジを捧げる。そのため、「仔畜祭」(töl-ün takilya)ともいう。具体的なやり方は秘儀とされているため、これ以上の情報を聞くことはできなかった。八白宮祭祀においても仔ヒツジの辜丸をチンギス・ハーンの直系子孫のタイジたちによって捧げられる儀礼があり (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.105-107, 楊 1995, p.43), おそらく相似した要素をおびていたのであろう。

(4) 秋季大祭 (namur-un yeke tayilya) :

オルドス暦のトゥルーン・クールル月 (terigün kögeler) すなわち陰暦8月13日におこなわれる。ヒツジの丸煮を最低9つ献上する。

(5) 冬當地大祭 (ebüljijiy-e-yin yeke tayilya) :

オルドス暦のハラ・ホジル月 (qar-a qujir), 陰暦11月3日におこなわれる冬當地大祭は、一年間の祭祀のなかでもっとも大規模なものである。旗衙門が任命した数名の貴族ダーマル(管事)たちも、チンギス・ハーン一族を代表して参列することになっていた。最低9つのヒツジの丸煮を捧げなければならない。

以上がアラク・スウルデの平時における一年間の祭祀である。上記の諸祭祀はいずれも「丸煮の献上」からはじまり、「主君への献香」(ejen sang)と「天のことば」を唱えてから、「恩賜の分配」(yamu tügegekü)をもって終了する。アラク・スウルデと軍神黒いスウルデの祭祀とを比較したのが表10である。祭祀の名称と内容は一部共通するものの、期日が異なっている。

(6) 喇叭の平時祭

アラク・スウルデの喇叭はかつて四本あったが、同治年間の回民反乱を経て、清朝末期から中華民国期にかけては二本になっていた。喇叭は、チョムチョクとよばれる天幕の

表10 アラク・スウルデと黒いスウルデの祭祀比較

月 日	Qar-a Süldeの祭祀名称	月 日	Alay Süldeの祭祀名称
1月3日	qaburjijiy-a-yin tayilya	1月4日	sin-e jil-ün tayilya
4月4日	jusalang-un tayilya	3月21日	qabur-un yeke tayilya
6月10日	uγuray qurayan tayilya	5月6日	jusalang-un tayilya
7月14日	tasaman tayilya (yeke tayilya)	8月13日	namur-un tayilya
10月3日	ebüljijiyen-ü tayilya	11月3日	ebüljijiy-e-yin tayilya
12月23日	γal-un tayilya		
12月29日	bitügün-ü čayalaqu tayilya		

出典: Altan Ordun-u tayilya, 1983.

ダルハトのインタビュー

31) オルドス暦については, Mostaert (1937), Qurčabilig (1988b, pp.5-18) らの記述, 論考がある。モンゴルの歲月名については, 小林高四郎の研究 (1957, pp.55-65) がある。昨今, モンゴルの暦法をチベットに起源を求める見方があるが, モンゴル側の独自の資料を十分検討しないで, ひたすら外部と結びつける姿勢に疑問を感じる。



なかに収められていた。

祭祀の期日は、上記アラク・スウルデのと同じで、祭祀のときはそのつど供物としてヒツジの丸煮をひとつ献上していた。ダルハトのチェルビ爵のラシノルー氏は1953年に一度喇叭の春季大祭に参加したという。

### 3.4.2 アラク・スウルデの血祭

ダルハトたちが「十三年に一度の寅年の血祭」と表現する特別な祭祀は、盛大におこなわれていたことを、前章で呈示した文書資料からもよみとれる。旗衙門が早い段階で準備の命令を度々発しており、血祭を重視する姿勢は鮮明である。血祭の目的は、「モンゴル軍の威勢を強め、敵を鎮圧する」ためである、とダルハトたちが口をそろえて答える<sup>32)</sup>。寅年以外に、盗賊や外敵が現れ、非常事態が発生したときも血祭をおこなうことがある。

軍神とされる黒いスウルデ、モンゴル帝国の象徴である白いスウルデの場合は、祭祀者自らが牧民のあいだを巡回し、丸煮などの祭祀用品を集める (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.310-315, 楊 1999, p.157)。これに対し、アラク・スウルデの場合は、血祭に使用する祭祀用品はすべてオトク旗衙門が用意する。慣例では寅年の秋になると、各佐領からヒツジとウシを徴収しはじめ、血祭の供物として9×9計81頭のヒツジを丸煮にし、ウシの丸煮も3つ使用する。

#### 血祭につどう守護神たち (sakiyus-ud)

血祭は寅年の陰暦11月3日におこなわれる。この日、オトク旗の札薩克は自ら参列し、オトク旗以外のオルドス六旗は王位継承人、隣接のウラト部とアラシャン部からは札薩克もしくは王位継承人が参加することになっていた。これだけの高位の貴族が一堂に会することは、チンギス・ハーンの八白宮祭祀、軍

神黒いスウルデ祭祀を除けば、他に類をみない空前の規模である。

チンギス・ハーン一族の直系子孫タイジたちの他に、オトク旗領内でまつられていた他の守護神たちもアラク・スウルデの祭殿につどう。具体的にはシャルブリドでまつられていたチンギス・ハーンの末子トロイ・エジン、エリイェントロガイという地にあったチンギス・ハーンの弟ブケ・ベルグーダイ、イケ・チャイダムという地にあったハサルゆかりの守護神 (写真8) などが集まる。末子トロイ・エジンの祭殿からは巨大な火打ち鎌と楽器チャルギ、弟ベルグーダイの祭殿からは鞍もしくは槍をそれぞれの祭祀者が持参してくる。イケ・チャイダムのハサルゆかりの祭殿から何を運んだかは不明である。これらの守護神はそれぞれ末子トロイ・エジン、弟ベルグーダイとハサルを代表するかたちでアラク・スウルデに集まる、とダルハトたちは説



写真8 イケ・チャイダムに立つ「ハサルの守護神」(1980年代に復元されたもの)

<sup>32)</sup> アラク・スウルデはハサルのスウルデである、と理解している人びとは、血祭はタンゲート(西夏)の呪術師を鎮圧するためにおこなわれると説明していた。

明していた。アラク・スウルデは決して上記の他の守護神のところへ運ばれることはないという。その理由として、末子トロイ・エジン、弟ハサルとベルゲーダイは、生前にアラク・スウルデを神聖視していたからだという。

ここで末子トロイ・エジンの祭祀者がいかにアラク・スウルデの血祭に関わっていたかを、文書と祭祀者ダルハトの証言という二つの面から見てみよう。

まず、表1のNo.19の文書は、1922年6月29日にオトク旗衙門から末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトに出された令状である。文書には「トロイ・エジンのチンサン・ユールチ・ヤムタトラ (Toloi Ejen-ü Čingsang Irügelči yamutad nar)」が全員早目にアラク・スウルデの祭殿に赴き、血祭に奉仕するように、と書いている (Narasun & Vangčuy 1998, p.790)。この年は壬戌年で、血祭は非常事態に対応するためにおこなわれたとしか考えられない。『オトク旗誌』によると、この時期に反漢族・反腐敗運動 (Duγuyilang) が活発化していた (『鄂托克旗誌』編纂委員会 1993, p.16)。旗内の不穏な要素と無関係ではなからう。

つぎに、末子トロイ・エジンのダルハトであるバダマ氏の経歴をふりかえってみよう。バダマ氏は1950 (庚寅) 年の血祭に参加したことがある。

寅年の陰暦10月上旬に旗衙門から血祭に参加するよにとの命令が届き、さっそく末子トロイ・エジンの守護神である火打ち鎌と楽器チャルギをもって旗衙門に出頭する。旗衙門からは「オルドス右翼中旗から尊事に参加する使者の印」 (Ordus-un barayun γar-un dumdadu qosiyun-ača erkim keregtü oruqu elčün-ü temdeg) という令牌<sup>33)</sup>をもった役人が合流し、行動をともにする。末子トロイ・

エジンのダルハトたちは、旗衙門で数日間過ごすのが、かれらはここでヤギの皮でつくるダスマという綱を用意しなければならない。

ダスマをつくるために、「神に捧げたヤギ」 (ongγun imay-a) を屠らなければならない。普通、「神に捧げたヤギ」は屠殺することはないが、チンギス・ハーンの八白宮と、軍神とされる黒いスウルデの祭祀においては、「神に捧げたヤギ」が使用される (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, pp.110-112, p.311, 楊 1995, p.43)。

「神に捧げたヤギ」に向かって火打ち鎌を打って火花を飛ばす。これによってヤギは清められたことになる。つづいてヤギの背中に酸乳と酒をかける。ヤギが身震いをしたら、新たに神に認知されたことになる。ヤギの腹腔を開けて屠り、皮が破れないように肉と内臓類を出して、皮袋 (tulum) にする。皮袋には酸乳と酒を入れて攪拌し、毛をむしりとる。背筋部分を一本に、胴体の左右部分の皮をそれぞれ10本ずつ、幅5センチくらいの皮綱にしたてあげる。21本の皮綱ダスマを楽器チャルギの柄に巻いて、アラク・スウルデの祭殿へ出発する。血祭がおこなわれる11月3日の10日前に到着しなければならない。皮綱ダスマは楽器チャルギとともに、アラク・スウルデの祭殿内に納められる。楽器チャルギは血祭のときに演奏される。ダスマの一部はアラク・スウルデの祭殿を更新するのに使われ、のこりは参拝者にお守り (adis) として配る。とくに出征時のお守りにすることが多いという。アラク・スウルデは戦いの守護神であることをうかがわせる。

チンギス・ハーンの八白宮の場合、「チンギス・ハーンと妃たちが無事越冬できるように」との目的も兼ねて、チンギス・ハーン一族の直系子孫タイジたちが皮綱ダスマを用意していた (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.110)。

33) このような令牌は清朝時代のオトク旗に7つあったが、現在は4つしかのこっていない、と地元文化財関係者が語っていた。

末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトたちは、トロイ・エジンを代表する立場にある(楊 1996, P.694)。皮綱の準備作業から見れば、アラク・スウルデに対して、末子トロイ・エジンが何らかの義務を負わされていたのではないかと想像する。

上記の守護神の他に、アラク・スウルデの一部をなす喇叭も寅年に運ばれてくる。

### 血祭の供物はジュルドと黒いやぎ

1950(庚寅)年の血祭も盛大におこなわれた。オルドスでは共産党政権が成立したばかりであった。当時オルドスの最高責任者のひとり、イケ・ジョー盟の副盟長馬富綱(Aytačin Bayandorji)が百名あまりのモンゴル人騎兵隊を率いて参加した。3.2で述べたように、馬富綱の戦友で、同じアクタチン部出身の馬良誠は戦死後にその戦馬はアラク・スウルデの神馬にされていた。スウルデの血祭にモンゴル軍の参加は昔から欠かせなかったという。共産党の幹部になっていた馬富綱もその伝統を忘れていなかったようである。

まず、アラク・スウルデに9×9計81個のヒツジの丸煮とジュルド(jüldü)とよばれる供物を献上する。ジュルド一個は丸煮81個に相当するもので、寅年の血祭のときにしか用いないという。ジュルドにはさまざまな種類があり(楊 1996, p.697)、アラク・スウルデのジュルドは顎、気管、心臓、肺臓がつながったままの供物で、「顎ジュルド」(ereü jüldü)の類に入るという。オルドス出身のホルチャバートルは、ジュルドは祖先祭祀を特徴づける供物であるとし(Qurčabayatur 1992, pp.5-20)、小長谷はジュルドを狩猟儀礼と結びつけたうえ、ジュルドの使用によって儀礼の聖性が高められていると指摘している(小長谷 1991, pp.318-323)。

血祭はスウルデの柵から東南へ9×9すな

わち81歩離れたところでおこなわれる。ここで使用されるのは、「不吉な黒いやぎ」(belge ügei qar-a imay-a)である。黒いやぎの口と鼻を手でふさいで、窒息死させる<sup>34)</sup>。内臓を口から出し、四肢が皮についたままの形で胴体から皮を剥がす。このような剥がし方で、生きていたときと同じような完全な皮袋(tulum)が得られる。胃袋に血と酒を注入して(写真9)から、皮袋のなかに入れる。皮袋の肛門を縫ってから石のうえにおき、皮袋のうえに顎を切りひろげたやぎの頭をスウルデの方に向けて乗せる。これで血の用意ができたことになる。

黒いやぎのすぐ近くに供卓がおかれ、その両側に40人の男が槍をもって二列に分かれて立つ。普段は天幕のなかに立っているスウルデをこのときには「招請」しだして、供卓に乗せる。

二人の「英雄」(Bayatur)と二人の「斧手」(Sükečin)、四人のデグルチン(Degigürčin)は、右腕を肩から露出して、天幕のところから外の供卓のところまで片足跳びをしてくる。デグルチンとは「片足跳びをする人」だ、との説明を受けたが、本来は特別の職掌を指



写真9 血祭りの血を用意する祭祀者—1998年の血祭の風景。

写真提供—サインジャ(賽音吉雅)

34) ヤギの殺し方に関するダルハトの記憶は異なっていた。窒息死させるのではなく、喉を切るとの説明もあった。軍神黒いスウルデの場合は、黒いやぎの喉を切る方法をとる。

すことばであろう。八人は二人ずつ腕を組み、そのうちの四人のデグルチンは、二本の小スウルデを背負うようにして片足で跳ぶ。インフォーマントたちによると、この八人はダルハトのなかでも特別な世襲制の集団であるというが、かれらに関する詳しい情報は得られなかった<sup>35)</sup>。

上記「英雄」ら八人が片足跳びでスウルデに近づくと、別の祭祀者ガブシューチン (γabsiyučin) が黒いヤギの頭を押す。それによってヤギの口から皮袋内の血がスウルデに向かって噴き出る。八人がスウルデのところに来て、二人の「斧手」が斧でヤギの角を叩き、デグルチンはスウルデでヤギを刺す。別のダルハトは矢を放ち、剣で刺す演出をくりひろげる (写真10)。ヤギの皮袋から出た血を、「英雄」ら八人が啜り飲む。この際、喇叭の演奏がおこなわれる。末子トロイ・エジンの専属祝詞師<sup>36)</sup>オトク・ユルールチが楽器チャルギを鳴らし、祭史や「天のことば」を唱える。最後にデグルチンがアラク・スウ



写真10 血祭の供物である「不吉な黒いヤギ」を犠牲にする風景

写真提供——サインジャ (賽音吉雅)

ルデを両手でもって、柵のなかに入る。このとき、柵のなかにはいたミンガト (千戸長) は、デグルチンに「敵をたくさん殺したか」と聞く。デグルチンは「たくさん殺した」と答え、スウルデをふたたび天幕に立てる。

### 血祭の終幕—卷狩

黒いヤギの血をスウルデに捧げてから、祭祀者ダルハト以外の男たちはウマに跨って、南西方向へ「千人大獵」(mingyan aba) に出かける<sup>37)</sup>。ボル・ギョレース (borugörügesü 「灰色の獣」との意) という鹿の一種を狩って、スウルデに献上するためである。20世紀に入ってから、オルドス地域では鹿が減ったため、同じ灰色の野ウサギで代用するようになったという (写真11)。狩った鹿あるいは野ウサギを上記黒いヤギの肉を



写真11 血祭りのときの千人大獵で狩った「灰色の獣」—野ウサギ

1998年の血祭の風景。写真提供——サインジャ (賽音吉雅)

35) デグルチンは今、「弓」という漢字姓をもち、ジラ郷のハルジャン・チャイダム (Qaljan Čayidam) に住む。なぜ、「弓」を漢字姓にしているのかは、不明である。斧手は斧と同じ発音の「富」を漢字姓にしている。かれらは現在、マルト村に住むという。

36) オトク・ユルールチについては楊 (1996, pp.666-669) を参照されたい。今だに神秘的なイメージをもつ祭祀者として伝承されている。

37) 別のインフォーマントは、女性たちも武装して卷狩に参加するという。

煮た汁に入れてゆで、ヒツジの丸煮と同じように盛って、スウルデに献上する。81頭ものヒツジの丸煮は最高級の供物である。そのうゑに聖性が高められた供物ジュルド（小長谷 1991, pp.318-323）も併用されている。そして最終的には卷狩の成果も捧げられた時点で、血祭は最高潮に達したといえよう。

鹿を狩って捧げることは、軍神黒いスウルデと帝国の象徴である白いスウルデの血祭にはない独特の儀礼である。軍事行動の前にスウルデをまつり、大規模な卷狩をおこなう現象は、『黄金史』第266節など年代記にも見られる（Lubsangdanjin 1990, pp.122-123）。また、1950年代までのオルドス七旗の札薩克たちも、同様のことを挙行していた。アラク・スウルデの血祭の一環としておこなわれる「千人大獵」は、まさに出陣前の軍事演習そのものである。逆にいえば、「千人大獵」は出征を意味し、狩った鹿は戦いの成果、つまり軍事行動そのものの再現である、ということであろう。

この一連の儀式は午前からはじまり、太陽が沈むときに終わる。鹿の肉はオルドス七旗の札薩克に恩賜として配られる。鹿を狩った人は旗衙門から表彰される<sup>38)</sup>。献上された81個のヒツジの丸煮のうち、末子トロイ・エジンに27個を恩賜として分け与える。

#### 4 結びにかえて

以上、文書資料と祭祀者ダルハトたちからの情報にもとづいて、アラク・スウルデの祭祀者集団の構成および祭祀活動の実態について述べてきた。最後に本章ではダルハトたちを含むモンゴル人が、アラク・スウルデを誰の守護神と見ているのかを紹介する。また、

なぜアラク（まだら）とよばれるようになったのかについて、筆者の仮説を呈示し、モンゴルの祭祀儀礼におけるアラク・スウルデの政治的な位置づけをこころみたい。

#### 4.1 アラク・スウルデの主宰者は誰なのか

アラク・スウルデは名射手ハサルのスウルデである、と主張するモンゴル人はアラク・スウルデ近くのイケ・チャイダムという地にある「ハサルの守護神」（写真8）を証拠にあげる。「イケ・チャイダムの守護神」については、オトク旗の公文書に記録がある。表1 No.45の文書は西暦1943年3月5日にオトク旗衙門から連隊長で梅林章京ブヤンタイという人物に出されたものである。これには「イケ・チャイダムという地に昔から尊び、まつってきた名射手ハサル主君とそのオボーなど」（Yeke Čayidam kemekü yaĵar iĵayur-ača erkesigülün takiĵayar iregsen Qabutu Qasar eĵen be mōn kü obuĵad）との表現がある（Narasun & Vangčuy 1998, p.970）。もうひとつNo.51の文書は、西暦1946年5月8日にオトク旗衙門から大隊長ボロバートルこと馬良誠に出されたものである。これには当守護神は「荒々しい守護神」（doĵsin sitügen）であるとしたうえで、「名射手ハサル主君の肖像画と祭殿天幕の覆い、柵などがかなり古くなった」（Qabutu Qasar eĵen-ü kürüg sitügen be čomčuy būriyesü qasiyan ĵūil-ūd yekede qaĵučiraba）ため、更新するように、との命令であった（Narasun & Vangčuy 1998, pp.1002-1003）。馬良誠をはじめ、アクタチン部とアラク・スウルデとの関連についてはすでに3.2で述べた。この文書から見れば、馬良誠は同時に「ハサルの守護神」とも関わっていたことが分かる<sup>39)</sup>。

38) 1950年の血祭のとき、最初にウサギを狩った人はジラ郷タブントロガイに住むグルグ（Gölgü）という人物だった。

39) イケ・チャイダムの守護神はラシニマ（Rasinim-a）氏、馬良誠の弟ダルマ（Darma）氏らによって復元された（写真8）。1989年から祭祀活動も再開した。これには八百宮の祭祀者たちも積極的に支援している。

アラク・スウルデの祭祀者たちラシノルー氏とボーソル氏に、「イケ・チャイダムの守護神」の性質を確かめてみた。二人はその存在を知らないと主張した。この二人はおそらく、祭祀者の立場でアラク・スウルデと「ハサルの守護神」の関連を認めたくないのではないかと筆者は推測している。ダルハトではないチョグルブ氏は、いわゆる「ハサルの守護神」とは、四角い天幕のなかでまつられていた剣であった、と証言している。

では、アラク・スウルデ祭祀にたずさわっていた人たちの見解を見てみよう。ダルハトのラシノルー氏、自らはダルハトではないが、ダルハトである父兄に長く追随したチョグルブ氏の二人は、アラク・スウルデはチンギス・ハーンの守護神スウルデであると主張する。そのうえで、アラク・スウルデがオトク旗でまつられるようになった経緯については、つぎのように説明している。オトクということばは末子を指すオトゴン(odγun)に由来し、オトク旗は「末子の旗」(odγon köbegün-ü qosiyu)であるという。ここでいう末子とは、チンギス・ハーンの末子トロイ・エジン<sup>1)</sup>を指す。末子トロイ・エジンの祭殿も同じオトク旗にあり、チンギス・ハーンの祭殿八白宮と密接に関連していた(楊 1996, pp.635-708)。ラシノルー氏とチョグルブ氏は「アラク・スウルデはチンギス・ハーンのスウルデ、その祭祀の主宰者(tayilya-yin ejen)は、末子トロイ・エジンである」との立場である。上記二人の見解は、モンゴルの末子相続制度を背景にしている。

もうひとりのダルハト、ボーソル氏はやや異なる見方をする。かれは、アラク・スウルデはチンギス・ハーンの守護神であり、祭祀の主宰者はチンギス・ハーンの弟、名射手ハサルであると説明する。かつてチンギス・ハーンがオルドス地域をとってタンゲート(西夏)を征服した際、名射手ハサルは大きな貢献をした。そのハサルの功績を後世に示す目的で、チンギス・ハーンは自らのスウル

デをオルドス地域に残し、ハサルにまつらせたという。タンゲート征服という歴史と関連しているため、アラク・スウルデの祭祀者集団内にタンゲート部(Tangγud Oboy)の出身者も含まれるという。たしかに、『黄金史』第266節には、チンギス・ハーンのタンゲート征服時に弟ハサルが同行したという記述はある(Lubsangdanjin 1990, pp.121-125)。タンゲートとの戦いにおけるハサルの活躍を語る伝承は、オルドス各地にたくさんある。

アラク・スウルデの主宰者を弟ハサルとするボーソル氏であるが、イケ・チャイダムにある「ハサルの守護神」との関連は認めない。このように、祭祀者ダルハトたちの見解は問題を複雑にしている。全体的に見れば、上記三人のインフォーマントのなか、ラシノルー氏とチョグルブ氏の見解は、末子相続というモンゴルの社会制度との関連を強調しているのに対し、ボーソル氏の意見の背景には年代記の記述と民間伝承がある。

これ以上アラク・スウルデの主宰者を特定する情報を入手できなかった。筆者は、以下二つの点に注目している。まず、末子トロイ・エジンの祭祀者ダルハトは昔からアラク・スウルデの皮綱を用意しなければならなかったことである。これは、末子トロイ・エジンがアラク・スウルデに対して何らかの義務を負わされていたことを意味しているのではないかと。つぎに、祭祀の恩賜分配を見てみよう。寅年の血祭には81個のヒツジの丸煮が献上され、祭祀の終わりに恩賜として関係者に分配される。その際、末子トロイ・エジンのダルハトには三分の一を占める27個の丸煮が与えられる。オトク旗札薩克には丸煮がひとつのみであるのに比べると、末子の獲得した恩賜の量は一段と目立つ。この二点から見れば、末子トロイ・エジンをアラク・スウルデの主宰者とみなす祭祀者たちの見解も納得できよう。

## 4.2 アラク（まだら）という表現の政治的な意義

アラク・スウルデをなぜアラク（まだら）とよぶかについて、サインジャラガルらはつぎのように述べている。アラク・スウルデの垂房が黒と白二色のウマの鬣を用いていたからアラクとよばれるようになった、という伝承は事実と反する。ダルハトたちの証言では、垂房には赤褐色の種雄馬の鬣しか使わなかったという。また、スウルデの槍に北斗七星の装飾があったことからアラクとよばれたとの伝聞もある。さらに「チンギス・ハーンは戦争に行くときは黒いスウルデをたずさえ、平時には白いスウルデを立て、半戦争半平時のときにはアラク・スウルデを立てた」という言い伝えもあるという (Sayinjiryal & Šaraldai 1983, p.337)。スウルデの垂房が赤褐色であったことは、筆者もダルハトたちから確認した。北斗七星の装飾は、末子トロイ・エジンの祭殿にもあり (楊 1996, p.658)、アラク（まだら）とする根拠にはならない。筆者はむしろ「半戦争半平時のときにアラク・スウルデを立てた」との伝承の方が重要なヒントであると考えている。

黒いスウルデは軍神とされ、戦いのシンボルとして年代記に登場する。ある仮説によると、黒いスウルデは本来チンギス・ハーン的最強の敵対者ジャムハの軍神であったが、ジャムハを鎮圧したあとにチンギス・ハーンの軍神になったという (Qurčabaýatur & Üjüm-e 1991, p.44)。チンギス・ハーンの名前テムジンも敵将の名からとったもので、敵の猛威を借りようという伝統はたしかにモンゴルにあり、この仮説にも一理はある。黒いスウルデはチンギス・ハーン軍のシンボルであり、軍威をたもつため決してその分散は許されず、唯一オルドスの「五百戸の黄色いダルハト」たちが数百年間にわたってまつてきたのである。

一方、白いスウルデはモンゴル帝国のシンボルである。1206年にテムジンが大ハーン

の位に即いたときに白いスウルデ（トウク）を立て、チンギスという称号を与えられていたことは『モンゴル秘史』第202節 (Eldengtei & Ardaĭab 1986, p.660) の記録をはじめ、多くの年代記に同様な記述がある。白いスウルデは帝国の成立と結びついている。それ以来、白いスウルデはつねに大ハーンの身边におかれてきた (楊 1999, pp.135-212)。黒いスウルデを軍神と、白いスウルデを国家の象徴とする伝統は、現在のモンゴル国にも生きている (楊 1999, pp.193-194)。

チンギス・ハーン一族の直系子孫タイジは、「白い骨」(čayan yasu) と称する優越血筋集団である。国家のシンボルとしての白いスウルデは同時に「白い骨」集団の象徴でもある。「白い骨」出自のチンギス・ハーン一族の直系子孫タイジがモンゴル各部を統率するように、後世では白いスウルデがモンゴル各地でまつられるようになっていた (楊 1999, p.193)。

以上のような軍神とされる黒いスウルデと国家の象徴たる白いスウルデの性質をふまえて、アラク・スウルデに関する筆者の仮説を示しておきたい。ここでいうアラク（まだら）は、黒と白の象徴性の集約を意味しているのではないか。つまり、黒に由来する軍の威力と白によって示される優越血筋の高貴さが、アラクとして結合されているということである。いわば、「威力ある白い骨」集団のアラク・スウルデが創出されていた、と理解できよう。

アラク・スウルデは誰の守護神なのか、その判断材料のひとつとして、実際に祭祀のときに唱えられる祭史 (öčig) の内容が、もっとも説得力のある根拠になる。ここで、黒いスウルデと白いスウルデ、それにアラク・スウルデの三者の祭史において、それぞれのスウルデがいかにかに位置づけられているのかを見てみよう。まずは黒いスウルデの祭史 (Qar-a Sülde-yin takilyan öčig) である (楊 1998, p.87)。

Deger-e yeren yisün tngri-den-eče  
sedüküi-dür

上の九十九の天から生成し

Isüküi bayatur-ača edüküdü

イエスゲイ・バートルからはじめ

yeke suu jalai-yin ičayurtu yertenčü-yin  
yeke ejen bolušan

偉大な精神の根本となり、世の中の主君  
となった

Temüjin suutu boyda-ača egüdügsen  
deger Tuγula-yin

テムジン（という）英明聖主から創造さ  
れた。上流トゥール河の

γurban ulqun-a debsikü saylaγar modun-  
u üjügür-eče

グルバン・オルクナ（という地で）踊り、  
サクラガル木の枝から

tungγan bosqaju temürün qadaγsun  
törü-yin tüsiy-e bolušan

高々と立て、鉄の杭（のように）国家の  
支え柱となった（黒いスウルデ）。

……

ここではまず黒いスウルデの位置づけをテムジンの父イエスゲイ・バートルとも結びつけている。文全体は、ハーンが即位した後、サクラガルという神木の下で部衆が連日踊ったという『モンゴル秘史』第57節と第117節にある記録（Eldengtei & Ardaγab 1986, p.104, pp.303-306）を簡潔に要約していることが分かる。白いスウルデの祭史もほぼ同じ語句からなる（楊1999, pp.180-181）。

一方、アラク・スウルデの祭史(Alay Sülde-yin takily-a-yin öčig)にはまったく異なる表現がある（楊1998, p.91）。

Bodančar sečen qaγan-bar egüdügsen

ボダ(ド)ンチャル・セチェン・ハーンによ  
って生成された

Boyda-yin sülde Borjigin temdeg

聖なるスウルデはボルジギン部の印であ

る。

この祭史では、アラク・スウルデはチンギス・ハーン一族のボルジギン部を生んだ神話上の祖先ボドンチャルに由来する、としたうえで、かつアラク・スウルデは優越血筋集団ボルジギン部の印 (temdeg), 象徴であることを名言している。ボルジギン部の印 (象徴) であるからこそ、おのずからモンゴル軍の威力としての黒色と、高貴な血筋としての白色を同時に集合させてアラク (まだら) になる、との位置付けではなかろうか。

ボルジギン部の象徴であるアラク・スウルデを継承できるのは、すべての財産を受け継ぐ権利をもつ「炉と火の息子」である末子以外には考えられない。チンギス・ハーンの八白宮祭祀、白いスウルデ祭祀とあわせて総合的に考えても、末子がアラク・スウルデを継承することには抵触しない。図2はモンゴルのさまざまな祭祀活動の政治構造を示したものである。その構造をつぎのように説明できよう。

ホルチャバートルの仮説では、ボドンチャルが主宰するハーン一族の祖先祭はジュゲリとよばれ、それはジュルドという供物を木に掲げて天をまつり、成員と天のつながりを確認する特徴をもっていた(Qurčabayatur 1992, pp.5-23)。のちにチンギス・ハーンによる集団統合の結果、チンギス・ハーンをモンゴル族全体の新しい祖先とする八白宮の祭祀が創造され、政治統合の役割を果たすようになったとき、ハーン一族のジュゲリ祭は傍系のガタギン部へと移行し、現在に至るという(Qurčabayatur 1992, pp.8-9)。

神話上の祖先ボドンチャルが主宰していた祖先祭祀がすべて傍系ガタギン部に移行したという説は、末子相続の社会制度に反しており、成立するとは考えられない。黒いスウルデが吸収されたかたちの八白宮は、全モンゴルの「総合的守護神」(yerüngkei-yin sitügen) であり、モンゴル族全体の政治統合を目的と



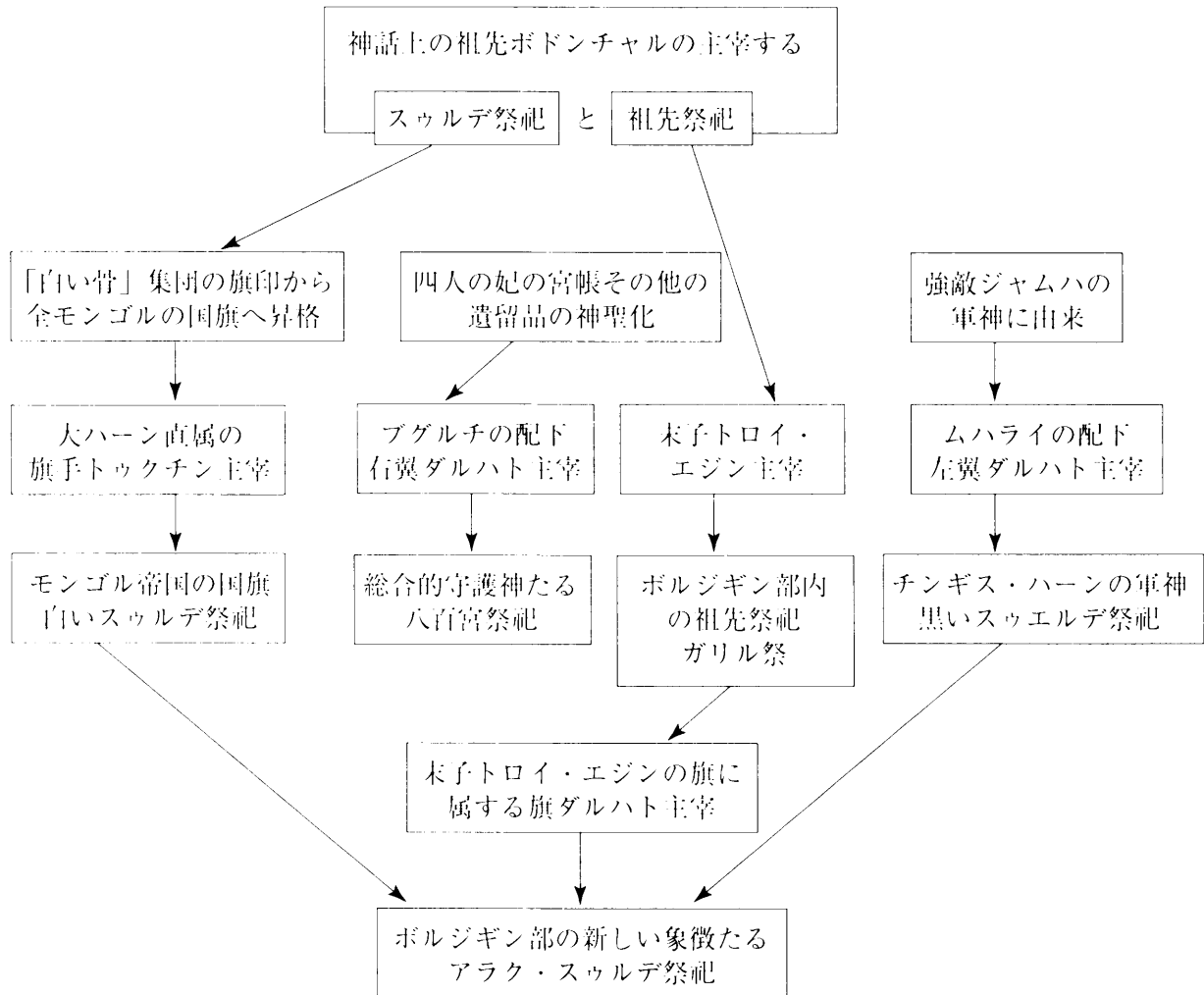


図2 モンゴルにおける祭祀儀礼の政治構造

する。チンギス・ハーンを全モンゴル統合の象徴としながらも、末子トロイ・エジンの主宰するハーン一族ボルジギン部内部の祖先祭祀は「ガリル祭」との名称で、八白宮の春季大祭の前夜におこなわれる（楊 1997, pp.676-700）。末子トロイ・エジンが主宰する「ガリル祭」は、ボドンチャルの時代にもあった祖先祭祀ジュゲリの一継承である、と考える方がモンゴルの社会制度に合致しており、適当であろう。

ボドンチャルが主宰していた祖先祭祀を末子トロイ・エジンが受けついで、ガリル祭になった。ボドンチャルのときにもまつられていたボルジギン部のスウルデは、「白い骨」たるボルジギン部が支配者になると同時に、国家のシンボルである白いスウルデに昇格された。このような再編成のなかで、軍神黒い

スウルデと白いスウルデ双方の精神を結合させ、全モンゴルの中枢に君臨する末子トロイ・エジンが新たに創出したのは、アラク（まだら）・スウルデではないか。

謝 辞

貴重な資料と情報を提供して下さったアラク・スウルデのダルハトであるラシノルー氏、ボーソル氏、ムンケ氏、トロイ・エジンのダルハトであるバダマ氏、それにチョグルブ氏、ラシニマ氏、ダルマ氏、オトク前旗党宣伝部長サインジャ氏に心から感謝する。また、本論文の草稿に目を通して下さった東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の中見立夫先生からは幅広い、有益なコメントをいただいた。文書の和訳に関しては、神戸商船大学の萩原守先生からご教示いただいた。衷心よりお礼を申し上げる。

## 参 考 文 献

- Chiodo, E. 1989/91. "The Book of the Offerings to the Činggis Qaγan" A Mongolian Ritual Text, *Zentralasiatische Studien*, 22, pp.190-220.
- . 1993. "The Book of the Offerings to the Činggis Qaγan" A Mongolian Ritual Text (part 2), *Zentralasiatische Studien*, 23, pp.84-144.
- Čoyiji (校注) 1983. *Altan Tobči* (モンゴル文『黄金史』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Dalanγurba 1989. *Qabutu Qasar-un Tayilya-yin Toyimu* (モンゴル文「ハプト・ハサル祭祀の概要」), 『内蒙古師範大学学報』(蒙文哲学版), 2, pp.44-50。
- Davaγamsu 1998. *Ejen Činggis-ün Öndegen Čayan* (モンゴル文『チンギス・ハーンの白神馬』), 北京: 民族出版社。
- Edükessig, Buyan, Dorungγa 1981. *Ordus Arad-un Duγiyilang-un Ködelgegen-ü Materiyal-un Emkidgel, degedü* (モンゴル文『オルドス人民ドゥグイラン運動資料集』上), 巴林右旗印刷廠。
- Eldengtei & Ardaγab 1986. *Mongγol-un Niγuča Tobčiyān-Seyiregüül tayilburi* (モンゴル文『モンゴル秘史還原註釈』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Heissig, W. 1987. A New Version of the "Battle with the Tayičighut", *Central Asiatic Journal*, Vol.31, pp.209-223.
- 『伊克昭盟地名誌』編輯委員会 1986 『内蒙古地名誌・伊克昭盟分冊』。
- 小長谷有紀 1991 「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」『東北アジアの歴史と社会』畑中幸子/原山焯編, 名古屋大学出版会, pp.303-333。
- 小林高四郎 1957 「モンゴルの歲月名に就いて」『民族学研究』21 (1-2), pp.55-65。
- Liu Jinsuo. 1981. *Arban Buyantu Nom-un Čayan Teüke* (モンゴル文『十善福白史』), 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Lubsangdanjin. 1990. *Erten-ü Qad-un Ündüsülegsen Törü Yosun-u Jokiya-l-i Tobčilan Quriyaγsan Altan Tobči Gemekü Orusibai (The Golden Summary Which Relates Briefly the Deeds of Civil Governing Established by Ancient Emperors)*, Ulus-un Keblel-ün Gaγar, Ulan-Bator.
- Mergenbaγatur. 1962. *Qad-un Ündüsüün-ü Erdeni-yin Tobči*, 北京: 新華印刷廠。
- Mostaert, A. 1937. *Textes Oraux Ordos*, Peiping.
- . 1956. Cart Mongole des Sept Bannières des Ordos, *Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle*, part I., Cambridge Mass.: Harvard University Press.
- Narasun & Vangčuy. 1998. *Činggis Qaγan-u Naiman Čayan Ordu* (モンゴル文『チンギス・ハーンの八白宮』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Narasun & Erdemtü. 1987. *Činggis Qaγan-u Naiman Čayan Ordu* (モンゴル文『成吉思汗八白室』) 第五輯, 東勝: 伊克昭盟檔案館。
- 『鄂托克旗誌』編纂委員会 1995 『鄂托克旗誌』 呼和浩特: 内蒙古人民出版社。
- Qurča, N. 1988a *Dörben Čay-un Qurim-un Alba Kiged Tegün-ü Neyikem Aju aqui-yin Saγuri* (モンゴル文「四季大祭の義務及びその社会経済的基盤」), 『内蒙古社会科学』(蒙文版) 4, pp.107-119。
- . 1988b *Erten-ü Mongγol Sar-a-yin Jarim Nereyidül-ün Učir* (モンゴル文「古代モンゴルの歲月名」), 『内蒙古圖書館工作』(3,4), pp.5-18。
- Qurčabaγatur. 1992(90). *Qatagin Arban Furban Ataγa Tugri-yin Tayilya* (モンゴル文『ガタギン部十三天神祭』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- Qurčabaγatur & Üjüm-e. 1991. *Mongγol-un Böge Mörgül-ün Tayilya Takilya-yin Suyul* (モンゴル文『モンゴルにおけるシャマニズム祭祀文化』), 海拉爾: 内蒙古文化出版社。
- ホルチャバートル & 楊海英 1997 「モンゴルの祭祀用絵画について—新発見の八白宮所蔵絵画」『内陸アジア史研究』12, pp.69-77。
- Rintchen, Y. 1959. *Les Matériaux pour l'Étude du Chamanisme Mongol*, Wiesbaden.
- Sayinjirγal & Šaraldai. 1983. *Altan Ordun-u Tayilya* (モンゴル文『黄金オルドの祭祀』), 北京: 民族出版社。
- Senggerinčin, D. 1989. *Qabutu Qasar-un Takilya-yin Ordun-u Sergüle* (モンゴル文「ハプト・ハサルの祭殿の再興」), 『内蒙古師範大学学報』(蒙文哲学版) 2, pp.35-44。
- Sayinjirγal. 1991. *Alay Sülde* (モンゴル文「アラク・スウルデ」), 『モンゴル語文』12, pp.51-61。
- Saγang Sečen. 1956. *Erdeni-yin Tobči* (Introduction by Antoine Mostaert), Part. II, III, IV, Harvard-Yenching Institute Scripta Mongolica 2. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Van Hecken, J.L. 1963. Les Lamaseries D'Otoγ (Ordos), *Monumenta Serica*, Vol. XXII(1), pp.121-167.

- 楊海英 1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『内陸アジア史研究』10, pp.27-54。
- 1996 「オルドス・モンゴルの祖先祭祀—末子トロイ・エジン祭祀と八白宮の関連を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』21(3), pp.635-708。
- 1997 「チンギス・ハーンとその子孫たち—世界帝国の英主から〈中華民族の英雄〉へ—」『茨城県立歴史館報』24, pp.1-13。
- 1998 『《金書》研究への序説』国立民族学博物館調査報告7。
- 1999 「モンゴルにおける〈白いスウルデ〉の継承と祭祀」『国立民族学博物館研究報告別冊』20, pp.135-212。
- 2000 「アルプス山とチンギス・ハーン—学術研究と文化復興運動の相互関連」『静岡大学人文論集』51, pp.27-77。
- ウラザミルツォフ 1936 『蒙古社会制度史』外務省調査部。